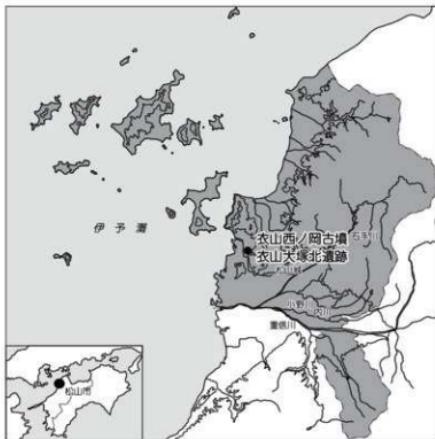


衣山西ノ岡古墳 衣山大塚北遺跡

2016

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

きぬやまにしのおかこふん
衣山西ノ岡古墳
きぬやまおおつかきたいせき
衣山大塚北遺跡



2016

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、平成 22 年度と 23 年度に松山市衣山地区で実施した二遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書です。同地区は松山平野北西部に位置し、地区内に広がる丘陵上には古くから古墳の存在が知られています。また、平地部には古代寺院に瓦を供給したとされる衣山瓦窯が所在しています。しかしながら、これまで地区内における発掘調査事例は少なく、集落様相については未だ解明されていないのが現状です。

衣山西ノ岡古墳の調査では、古墳に伴う周溝を発見しました。推定径 17 m を測る円形状に巡る溝で、溝内からは完形の須恵器をはじめ数多くの埴輪が出土しました。出土品より、古墳時代後期、6 世紀中頃の古墳と考えられます。

一方、衣山大塚北遺跡からは弥生時代後期や古墳時代終末期の竪穴建物が見つかりました。このうち、古墳時代の建物からは松山平野内でも検出事例の少ないカマドに伴う煙道が検出されました。これらのことから、衣山地区には弥生時代や古墳時代の集落が確実に存在していることが明らかになりました。

このような調査成果を得られましたのも、地権者並びに関係各位の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには文化財保護及び生涯学習に資するものとなりますことを切に願います。

平成 28 年 3 月

松山市教育長　　山本　昭弘

例　　言

1. 本書は平成 22 年度と 23 年度に財団法人松山市文化・スポーツ振興財団〔現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団〕埋蔵文化財センターが松山市衣山二丁目・三丁目において民間の開発に伴い実施した二遺跡の発掘調査成果をまとめた調査報告書である。
2. 本書では、遺構名を略号化して掲載している。
竪穴建物：SB、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 本書掲載の基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準拠した。
5. 本書掲載の挿図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 屋外調査における写真撮影は調査担当者（相原浩二・水本完児）と大西朋子が行い、本書掲載の遺物写真や図版の作成は大西が担当した。
7. 本書の執筆は、第 1・2・4 章が水本、第 3 章は相原が行い、証書は丹生谷 道代が担当した。
8. 本書の編集は、水本が担当した。
9. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管されている。
10. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・刊行組織	
第3節 歴史的環境	3
第2章 衣山西ノ岡古墳.....	5
第1節 調査の経緯	5
第2節 層 位	7
第3節 遺構と遺物	
第4節 小 結	26
第3章 衣山大塚北遺跡.....	31
第1節 調査の経緯	31
第2節 層 位	32
第3節 遺構と遺物	34
第4節 小 結	39
第4章 調査の成果と課題.....	43

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 周辺の遺跡と史跡（縮尺1：10,000）…………… 3

第2章 衣山西ノ岡古墳

第2図 調査地位置図（縮尺1：1,000）…………… 6

第3図 調査地区割図（縮尺1：200）…………… 8

第4図 北壁土層図（縮尺1：40）…………… 9

第5図 南壁土層図（縮尺1：40）…………… 10

第6図 東壁・西壁土層図（縮尺1：40）…………… 11

第7図 遺構配置図（縮尺1：150）…………… 12

第8図 周溝1測量図（縮尺1：150）…………… 13

第9図 周溝1断面図（縮尺1：40）…………… 14

第10図 周溝1出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）…………… 16

第11図 周溝1出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）…………… 17

第12図 周溝1出土遺物実測図（3）（縮尺1：3）…………… 18

第13図 周溝1出土遺物実測図（4）（縮尺1：3、1：4）…………… 19

第14図 SD1測量図（縮尺1：40）…………… 20

第15図 SK1測量図（縮尺1：40）…………… 20

第16図 SK2・SK3測量図（縮尺1：40）…………… 21

第17図 SK4・SK5測量図（縮尺1：40）…………… 21

第18図 SK6測量図（縮尺1：40）…………… 22

第19図 SK6出土遺物実測図（縮尺1：4）…………… 23

第20図 SK7測量図（縮尺1：40）…………… 24

第21図 近現代坑出土遺物実測図（縮尺1：3）…………… 25

第22図 地点不明出土遺物実測図（縮尺1：3）…………… 25

第3章 衣山大塚北遺跡

第23図 調査地位置図（縮尺1：2000）…………… 32

第24図 土層図（縮尺1：60）…………… 33

第25図 遺構配置図（縮尺1：120）…………… 34

第26図 SB2測量図（縮尺1：50）…………… 35

第27図 SB1測量図（縮尺1：40）…………… 36

第28図 SB1出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）…………… 37

第29図 SB1出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）…………… 37

第30図 SP1・SP2・SK1出土遺物実測図（縮尺1：4）…………… 38

第31図 SD1測量図（縮尺1：50）…………… 38

第32図 SD1出土遺物実測図（縮尺1：4）…………… 39

表目次

第1章 はじめに

表 1 調査地一覧	1
-----------------	---

第2章 衣山西ノ岡古墳

表 2 周溝一覧	27
表 3 溝一覧	
表 4 土坑一覧	
表 5 柱穴一覧	28
表 6 周溝1出土遺物観察表（土製品）	29
表 7 SK6出土遺物観察表（土製品）	30
表 8 近現代坑出土遺物観察表（装身具）	
表 9 地点不明出土遺物観察表（土製品）	

第3章 衣山大塚北遺跡

表 10 堅穴建物一覧	40
表 11 溝一覧	
表 12 土坑一覧	
表 13 柱穴一覧	
表 14 SBI出土遺物観察表（土製品）	41
表 15 柱穴出土遺物観察表（土製品）	42
表 16 SK1出土遺物観察表（土製品）	
表 17 SD1出土遺物観察表（土製品）	
表 18 表採出土遺物観察表（土製品）	

写真図版目次

第2章 衣山西ノ岡古墳

図版 1 1 調査地全景（西より）	
2 表土掘削状況（南西より）	
図版 2 1 遺構検出状況（北西より）	
2 遺構完掘状況（北西より）	
図版 3 1 周溝1検出状況（西より）	

- 2 南壁土層（北より）
- 図版 4 1 周溝 1 ベルト土層（南より）
2 周溝 1 遺物出土状況①（北東より）
- 図版 5 1 周溝 1 遺物出土状況②（北東より）
2 周溝 1 西半部遺物出土状況①（北東より）
- 図版 6 1 周溝 1 西半部遺物出土状況②（北西より）
2 SK6 検出状況（北西より）
- 図版 7 1 SK6 遺物出土状況（北東より）
2 SK7 検出状況（北西より）
- 図版 8 1 周溝 1 出土遺物①
- 図版 9 1 周溝 1 出土遺物②
- 図版 10 1 出土遺物（周溝 1 : 23 ~ 26、SK6 : 29・31 ~ 33、近現代坑 : 34）

第3章 衣山大塚北遺跡

- 図版 11 1 調査区周辺状況（西より）
2 調査区全景と遺構検出状況（東より）
- 図版 12 1 遺構検出状況（西より）
2 遺構完掘状況①（西より）
3 遺構完掘状況②（東より）
- 図版 13 1 SB2 完掘状況（東より）
2 SB1 完掘状況（北西より）
- 図版 14 1 出土遺物（SB1 : 1 ~ 10、SP1 : 11・12、SP2 : 13、SK1 : 14・15、SD1 : 16 ~ 19、
表採 : 20 ~ 23）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本書掲載の二遺跡は、埋蔵文化財包蔵地『No.40 永塚古墳』内における民間業者による宅地分譲に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査である。

衣山西ノ岡古墳は、財團法人松山市文化・スポーツ振興財團（現 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團）が有限会社アットホーム代表取締役 田原 信幸氏との間で委託契約を結び、平成22年度から23年度にかけて行った調査である。一方、衣山大塚北遺跡は、同財團が株式会社ミツワ都市開発代表取締役 佐伯 敦義氏と委託契約を結び、平成23年度に実施した調査である。各調査の所在地や期間、面積等は表1に記す。なお、両遺跡に関する報告書の刊行に伴う整理作業は、平成27年度に公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積 (m ²)	調査期間
衣山西ノ岡古墳	松山市衣山三丁目641番、642番、647番1-2-3の各一部	約136	平成23年3月1日～同年4月15日
衣山大塚北遺跡	松山市衣山二丁目521番1の一部	約25	平成23年9月22日～同年10月14日

第2節 調査・刊行組織

(1) 調査組織

〔平成22年4月1日時点〕

松山市教育委員会

財團法人松山市文化・スポーツ振興財團

教育長	山内 泰	理事長	一色 哲昭
事務局	局長 藤田 仁	事務局	局長 松澤 史夫
企画官	勝谷 雄三	次長	砂野 元昭
企画官	青木 茂	施設利用推進部	部長 中越 敏影
文化財課	課長 駒澤 正憲	事務局	局長 松澤 史夫
主幹	森 正経	次長	砂野 元昭
副主幹	三好 博文	施設利用推進部	部長 中越 敏影

埋蔵文化財センター 所長 重松 佳久
主査 栗田 茂敏
主任 水本 完児(担当)
大西 朋子(担当)

〔平成 23 年 4 月 1 日時点〕

松山市教育委員会

事務局 教育長 山内 泰
企画官 渡部 満重
企画官 青木 茂
文化財課 課長 駒澤 正憲
主幹 森 正経
主査 竹内 昭男

財団法人松山市文化・スポーツ振興財團

事務局 理事長 一色 哲昭
次長 近藤 正
施設利用推進部 部長 中越 敏影
事務局 局長 松澤 史夫
次長 砂野 元昭
施設利用推進部 部長 中越 敏影
埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
主査 栗田 茂敏
主任 水本 完児(担当)
主任 相原 浩二(担当)
大西 朋子(写真担当)

(2) 刊行組織

〔平成 27 年度〕

松山市教育委員会

事務局 教育長 山内 泰
企画官 渡部 満重
企画官 青木 茂
文化財課 課長 駒澤 正憲
主幹 森 正経
主査 竹内 昭男

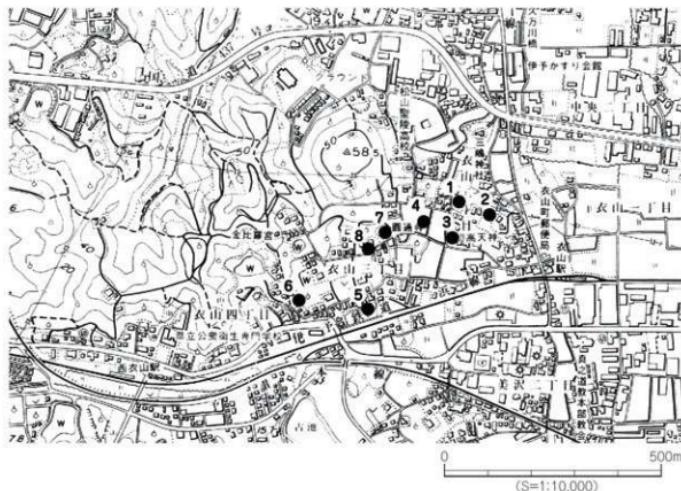
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團

事務局 理事長 中山祐治郎
次長 中西 真也
次長兼総務部長 輢田 正彦
施設利用推進部 部長 渡部 広明
埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
主査 栗田 茂敏
主任 水本 完児(整理担当)
主任 相原 浩二(整理担当)
大西 朋子(写真担当)

第3節 歴史的環境

松山市衣山地区では発掘調査事例が少なく、松山平野の中でも遺跡の分布や様相があまり解明されていない地域である。ここでは、発掘調査が実施された遺跡を中心に、概要を説明する。

衣山地区に広がる低位丘陵部は埋蔵文化財包蔵地「No.2 永塚古墳」に指定されており、かつては多くの古墳が存在したが、粘土採取や果樹園造成等の要因により消滅したものが多数ある。その中で、衣山大塚北遺跡の東方、伊予鉄衣山駅北西部の丘陵上にて、昭和59年度に松山市教育委員会により「永塚古墳」の調査が実施された。全長28m超、前方部長10m超、後円部直径推定18m、くびれ部幅12mを測る前方後円墳で、石室を作っているものの遺存状態が悪く、竪穴式石室、横穴式石室、いずれとも確定できていない。遺物はくびれ部地山整形に伴う凹みや、その付近にまとまって出土しており、多量の埴輪と須恵器が出土した。なお、これらの遺物には弥生土器のはか奈良・平安時代の土器なども含まれている。出土遺物より、古墳時代後期、6世紀後半頃の古墳と考えられている。また、衣山大塚北遺跡の南西約70mの地点には、平成20年度に財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化



1.衣山西ノ岡古墳 2.衣山大塚北遺跡 3.衣山北組遺跡 4.永塚古墳 5.衣山瓦窯跡（推定地）6.初高天神
7.薙通寺の地蔵尊 8.大井川の井戸

第1図 周辺の遺跡と史跡

財センターにより発掘調査が実施された衣山北組遺跡があり、弥生時代から古代の遺構・遺物が検出されている。調査で検出した掘立柱建物は2間×2間以上の総柱構造であるが、特徴として柱の構築方法が挙げられる。建物北辺及び南辺の柱穴は柱列の位置に幅25～40cmの溝状に掘り窪めた中に柱穴が建てられており、西辺に位置する3基の柱穴は建物内側から外側に向けて斜めに掘られており、そのスロープを利用して柱を建てたものと推測されている。出土遺物より、古墳時代後期以降の建物と考えられている。このほか、衣山西ノ岡古墳の東方、伊予鉄衣山駅から西へ約200mの地点には古代の瓦窯である衣山瓦窯があり、大正14年に発見された瓦には複弁蓮華文、重弧文の軒丸瓦など松山平野内でも貴重な遺物が発見されている。

【参考文献】

- 十亀 幸雄 1982「永塚古墳測量調査略報」『遺跡 第22号』
栗田 茂敏 2013「永塚古墳」松山市文化財調査報告書第160集
山之内志郎 2009「衣山北組遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報21

第2章 衣山西ノ岡古墳

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2010（平成22）年10月、有限会社アットホーム代表取締役 田原信幸氏（以下、申請者という。）より、松山市衣山三丁目641番、643番1・2・3・4、644番、645番、646番、647番1・2・3地内における宅地分譲にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地周辺では、申請地北東部にて平成20年度に衣山北組遺跡の調査が実施され、弥生時代から古代までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。このほか、昭和60年度には水塚古墳の調査が実施され、石室や多数の副葬品が発見されている。

これらのことから、2010（平成22）年11月1日（月）と2日（火）の2日間、財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は、申請地内における試掘調査を実施した。その結果、衣山三丁目641番、642番、647番1・2・3地内において、古墳に伴うと思われる周溝を検出した。

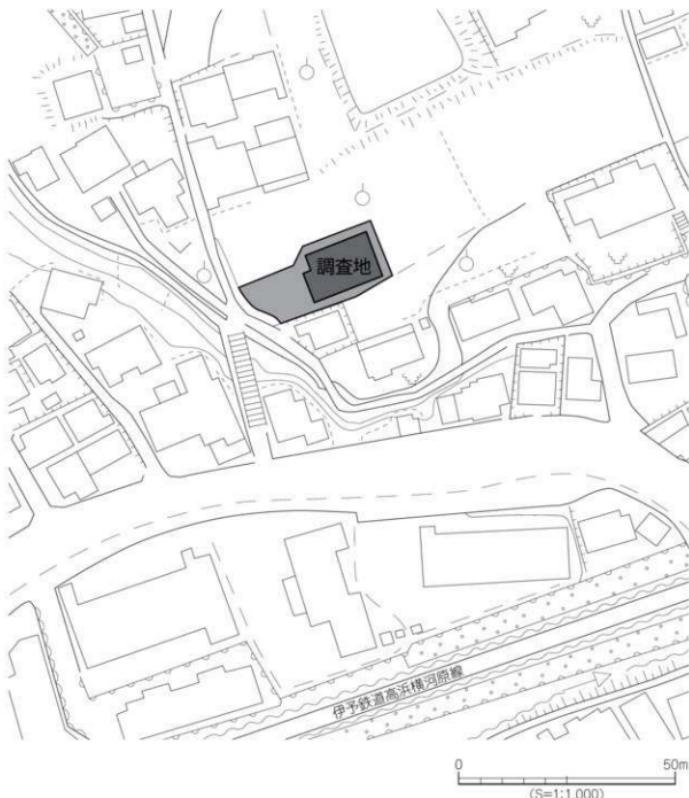
この結果を受け、文化財課と申請者は協議を行い、開発に伴い破壊される遺跡に対して記録保存の為の発掘調査を実施することになった。調査は埋文センターと申請者との間で、松山市衣山三丁目641番、642番、647番1・2・3の各一部を対象とする発掘調査に伴う委託契約が結ばれ、埋文センターが主体となり、2011（平成23）年3月1日より開始した。

2. 調査の経緯

- 3月1日：調査地の安全対策として、調査地内に杭を打設し、ロープ張りを行う。同日、契約業者により発掘機材（テント、水中ポンプ、トイレ等）の搬入が行われる。
- 3月3日：発掘用具を搬入し、屋外調査を開始する。試掘調査の結果より、重機（バックホー0.1m³、3t不整地運搬車）を使用し、第Ⅲ層までの掘削を行う。
- 3月8日：第Ⅳ層上面にて、遺構検出作業を行う。なお、検出時には近現代の造成に伴う擾乱坑（近現代坑と呼称）が数多く存在したため、これらの掘削を遺構検出作業と併行して行う。
- 3月9日：測量業者に委託し、調査地内に国土座標点の打設が行われる。
- 3月10日：遺構検出作業を終了し、検出状況写真を撮影する。検出した遺構は周溝、溝、土坑、柱穴である。
- 3月11日：本日より、周溝の調査を開始する。まず、周溝内に5箇所のセクションベルトを設定し、理土の堆積状況を確認する。その結果、埋土は3層に分層できたため、層ごとに掘り下げや遺物の取り上げをし、遺物出土状況図の作成や出土状況写真を撮影する。
- 3月12日：調査壁面の土層図の作成と、平板測量による遺構配置図を作成する。
- 3月15日：周溝の調査を終了し、土坑や柱穴の調査を開始する。

衣山西ノ岡古墳

- 4月6日：検出した遺構の掘り下げや、測量作業を終了する。
- 4月7日：調査区全域の精査をし、遺構完掘状況写真を撮影する。
- 4月11日：安全対策用に設置した杭やロープの撤去、並びに土留め用に設置したコンバネ類の撤去作業を行う。
- 4月15日：地権者を対象とした現地説明会を開催し、その後、発掘用具を撤去して、屋外調査を終了する。



第2図 調査地位置図

第2節 層位

調査地は松山平野西部、標高27.00mの微高地に位置し、調査以前は果樹園であった。調査地の基本層位は、以下の4層である（第4～6図、図版3）。

第I層：土色・土質の違いで六種類に分層される。

I ①層－表土〔灰色土（10Y 5/1）〕で調査区南半部と北東部と北西部にみられ、層厚3～25cmを測る。

I ②層－灰褐色土（7.5YR 6/2）と明黄褐色土（10YR 7/6）の混合土で、調査区北東部を除く地域にみられ、層厚6～48cmを測る。

I ③層－灰オリーブ色土（5Y 5/2）とオリーブ黄色土（5Y 6/3）の混合土で調査区北半部にみられ、層厚4～32cmを測る。本層中からは、陶磁器片が数点出土した。本層上面において、土坑3基（SK2・3・5）を検出した。

I ④層－黄橙色土（10YR 7/8）で調査区南東部と北西部にみられ、層厚4～20cmを測る。

I ⑤層－オリーブ色土（5Y 6/6）にオリーブ黄色砂（5Y 6/3）が混入するもので、調査区北西にみられ、層厚4～15cmを測る。

I ⑥層－灰褐色土（5YR 6/2）と、にぶい赤橙色土（10YR 6/4）の混合土で、調査区南半部にみられ、層厚2～20cmを測る。本層上面において、柱穴1基（SP1）を検出した。

第II層：にぶい黄橙色土（10YR 7/3）と、にぶい褐色土（7.5YR 5/4）の混合土で、調査区南東部を除く地域にみられ、層厚4～25cmを測る。

第III層：明黄褐色土（2.5Y 6/8）で調査区西半部にみられ、層厚3～33cmを測る。

第IV層：明黄褐色シルト（10YR 7/6）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。

検出した遺構や出土遺物より、第II層は近世、第III層は古墳時代以降に堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内に5m四方のグリッドを設定した（第3図）。グリッドは北から南へA・B・C・D・E、西から東へ1・2・3・4とし、A1・A2・・・E4といったグリッド名を付けた。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に使用した。

第3節 遺構と遺物

調査で検出した遺構は、周溝1条（古墳時代）、溝1条（近世）、土坑7基（古墳時代：3基、近世：4基）、柱穴27基である（第8図、図版2）。調査では墳丘は削平され、古墳の埋葬施設である主体部や盛土は検出されなかつたが、周溝は古墳に伴うものと考えられることから、調査で検出した周溝を含む古墳を「西ノ岡古墳」と命名した。

遺物は周溝や土坑のほか、第I③層中や近現代坑内より弥生土器（後期）、土師器（古墳時代～近世）、須恵器（古墳時代～古代）、埴輪（古墳時代）、陶磁器（中世～近世）、鉄製品、石器、管玉が出土した。特に周溝内からは弥生土器や土師器、須恵器片のほかに、埴輪片が比較的数多く出土した。なお、遺物の出土量は、遺物収納用箱（44×60×14cm）に約8箱分である。

3. 調査組織

所 在 地：松山市衣山三丁目 641 番、642 番、647 番 1・2・3 の各一部

調査面積：約 136m²

調査期間：2011（平成 23）年 3 月 1 日（火）～ 同年 4 月 15 日（金）

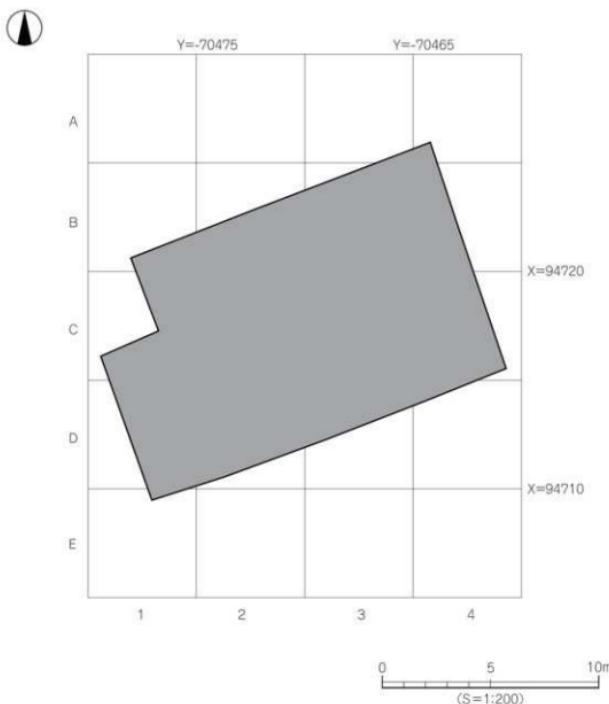
調査要因：宅地分譲に伴う緊急調査

契 約 者：有限会社アットホーム 代表取締役 田原 信幸

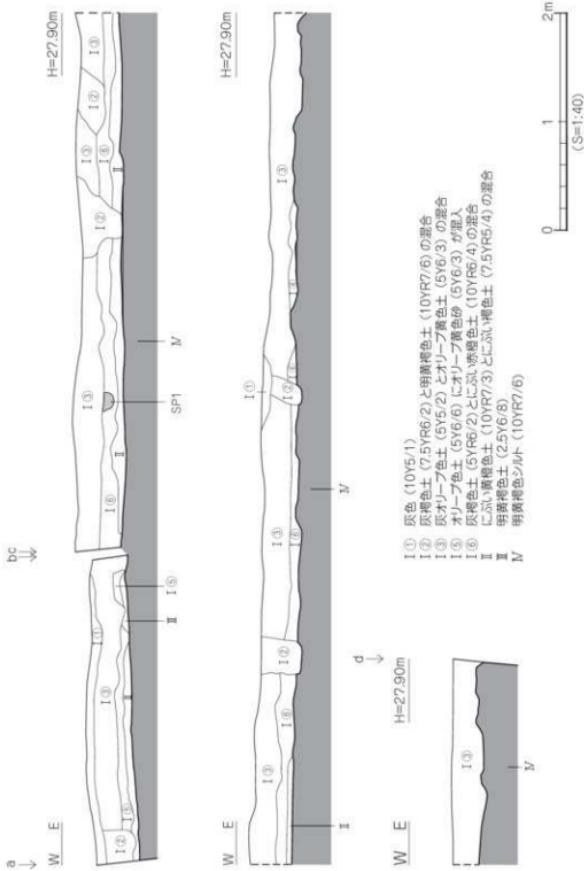
調査主体：財団法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター 水本完児（調査担当）

大西朋子（写真担当）

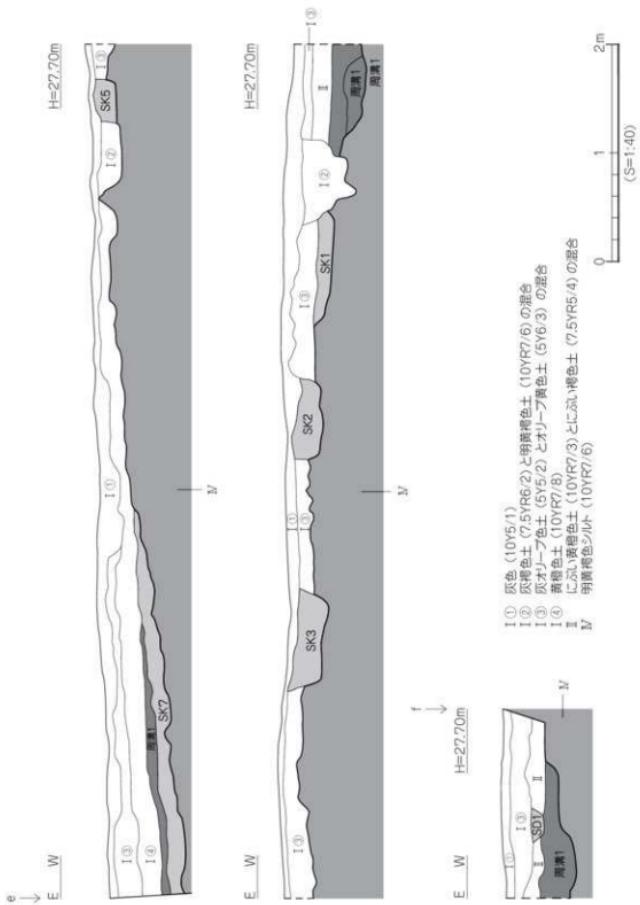


第 3 図 調査地区割図

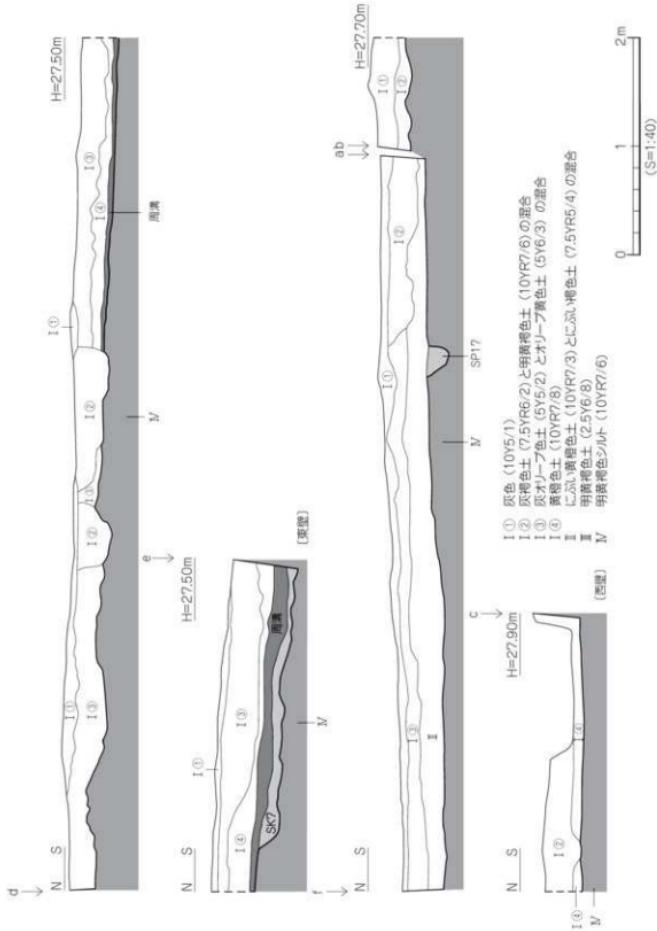


第4圖 北韓土壤圖

衣山西ノ岡古墳



第5図 南塁土層図



第6回 東壁・西壁土層図

1. 周溝

周溝1（第7～9図、図版3～6）

調査区は全城B2～D4区で検出した周溝で、周溝南東部は土坑SK7と切り合い、周溝南側は調査区外へ続く。第IV層上面での検出であり、周溝西側は第I④層、東側は第II層が覆う。平面形態はやや東西に長い円形を呈し、規模は東西検出長17.00m、幅2.40m、深さ50cmを測る。周溝基底面には凹凸がみられ、周溝北側中央部が最も高く漸次、南側へ向けて傾斜する（最大比高差45cm）。

断面形態はレンズ状を呈し、埋土は3層に分層できる。1層は黄褐色土（10YR 5/6）、2層は明黄褐色土（10YR 6/6）に灰黃褐色土（10YR 6/2）がブロック状に混入するもの、3層は明黄褐色土（10YR 6/6）である。周溝埋土は大半が1層であるが、周溝南西部は基底面が低くなってしまい、3層の埋土を確認した。このほか、周溝北東部と南東部では2基の土坑（SK6・7）を検出した。このうち、SK6は周溝基底面にて検出したもので、出土遺物より周溝に伴う遺構と考えられるが、SK7は調査壁面の土層観察により周溝構築以前の遺構である。

周溝内からは弥生土器や土師器、須恵器のほかに埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪）や石器



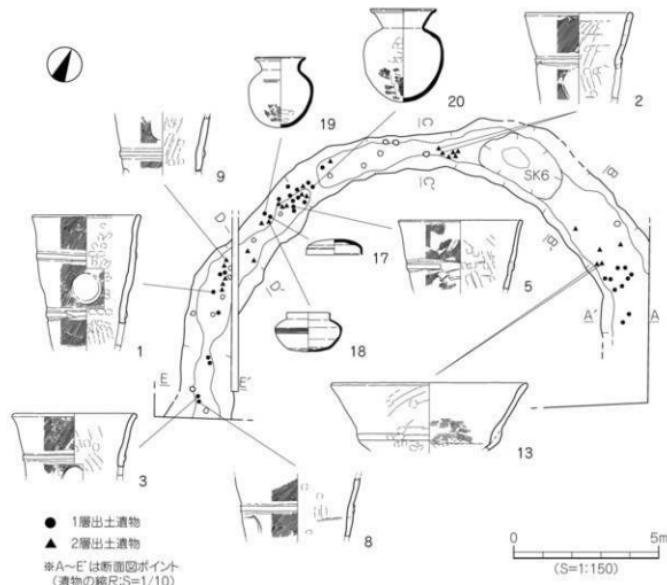
第7図 遺構配置図

が出土した。なお、遺物は周溝基底面や埋土中位付近から出土しており、大半は破片ばかりであるが、出土状況から接合可能なものが数多くみられた。また、出土した埴輪には茶褐色を呈する硬質のものと、淡黄色を呈する軟質のものとがみられた。このほか、周溝存続期とは異なる時期の遺物（弥生時代、奈良～平安時代）が数点ではあるが周溝内から出土した。なお、掲載した遺物のうち11点（1・2・3・5・8・9・13・17～20）は出土地点を表示した。

出土遺物（第10～13図、図版8～10）

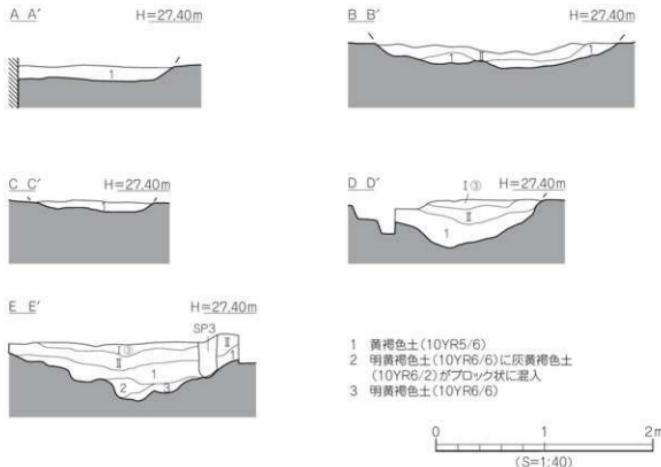
円筒埴輪（1～12）

1は底部を欠損するものの、全体1/2の残存で、推定口径25cmである。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は直線的に仕上げられている。断面台形状の突帯を貼り付けられているが、ナデにより中央部がわずかに凹む。突帯の上下には、強い指オサエが見られる。器体に穿たれる孔は、突帯間と突帯下の二箇所ある。平面形態は円形で、直径72cmである。なお、孔は外側から内側へ向けて穿たれている。外面には、右ナマネ上がりのハケメ調整を施し、内面には指オサエやナデ調整がみられる。土師質で焼成は良好であり、色調は内外面共に、にぶい褐色である。2は1/2の残存で、推定口径24.6cmである。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部は直線的に仕上げられている。中央部が凹む断面台形状



第8図 周溝1測量図

の突帯を貼り付け、突帯の上下には指オサエとナデがみられる。突帯下には円孔があり、外側から内側へ向けて穿たれている。外面は右ナナメ上がりのハケメ調整、内面には指オサエとナデ調整を施す。土師質で焼成は良好であり、色調は外面がにぶい褐色、内面は明黄褐色である。3・4は小片で、3は推定口径 27.4cm である。口縁部は外反し、口縁端部は僅かに凹む。中央部が凹む断面台形状の突帯を貼り付け、突帯下には円孔を穿つ。外面には右ナナメ上がりのハケメ調整を施し、内面には部分的にナデがみられる。土師質で焼成は良好であり、色調は外面が橙色、内面は明黄褐色である。4は推定口径 28.2cm で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。口唇部より僅かに下がった位置には沈線 1 条が巡り、断面台形状の突帯を貼り付ける。外面には右ナナメ上がりのハケメ調整を施す。焼成は良好であり、色調は外面がにぶい褐色、内面は黄褐色である。5は 1/5 の残存で、推定口径 28.0cm である。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は直線的に仕上げる。丸みのある断面台形状の突帯を貼り付けているが、途切れる箇所がある。外面は右ナナメ上がりのハケメ調整、内面は指オサエとナデを施す。色調は外面共に、にぶい褐色である。6・7は小片で、6は推定口径 25.6cm である。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は凹む。断面台形状の突帯を貼り付け、外面には右ナナメ上がりのハケメ調整を施す。焼成は良好で、色調は内外面共に明黄褐色である。7は推定口径 25.6cm で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は直線的に仕上げる。外面には、右ナナメ上がりのハケメ調整を施す。焼成は良好であり、色調は内外面共に浅黄色である。8は 1/6 の残存で、胴部最大径 28.8cm



第9図 周満1断面図

である。断面台形状の突帯を貼り付け、突帯下に円孔を穿つ。なお、突帯は直線的ではなく、やや歪んでいる。焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面は明黄褐色である。9は1/4の残存で、胴部最大径21.8cmである。断面台形状の突帯を貼り付けるが、やや歪んでいる。突帯の上下には、円孔1個を穿つ。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面は明黄褐色である。10は1/4の残存で、胴部最大径30.6cmである。断面台形状の突帯を貼り付け、突帯下には外側から内側へ向けて円孔を穿つ。焼成は堅微で、色調は外面が灰黄褐色、内面にはにぶい褐色である。11は1/4の残存で、胴部最大径17.4cmである。基部付近の破片で焼成はややあまく、胎土中に石英、長石のほか黑色酸化土粒が多く含む。色調は、内外面共に灰黄色である。12は口縁部のみを欠損するが、底径15.6cm、胴部最大径27.0cmである。丸みのある断面台形状の突帯2条を貼り付け、突帯間に突帯上方に円孔(径6.8cm)を穿つ。突帯は全周せず、円孔の周囲は器表面がやや盛り上がっている。基部は直線的に立ち上がり、底端部は尖る。須恵質で焼成は良好であり、色調は内外面共に灰黄褐色である。

朝顔形埴輪(13)

13は朝顔形埴輪の坏部で、1/6の残存である。推定口径44.4cmで、口縁部は外反し、口縁端部は僅かに肥厚する。屈曲部には、丸味のある断面台形状の突帯を貼り付けている。焼成はあまく粗雑で、胎土中には石英や長石のほかに赤色酸化土粒が多く含まれている。外面の調整は磨減が著しく不明であるが、屈曲部内面にはヨコ方向のハケメ調整がみられる。色調は、内外面共に橙色である。

須恵器(14~21)

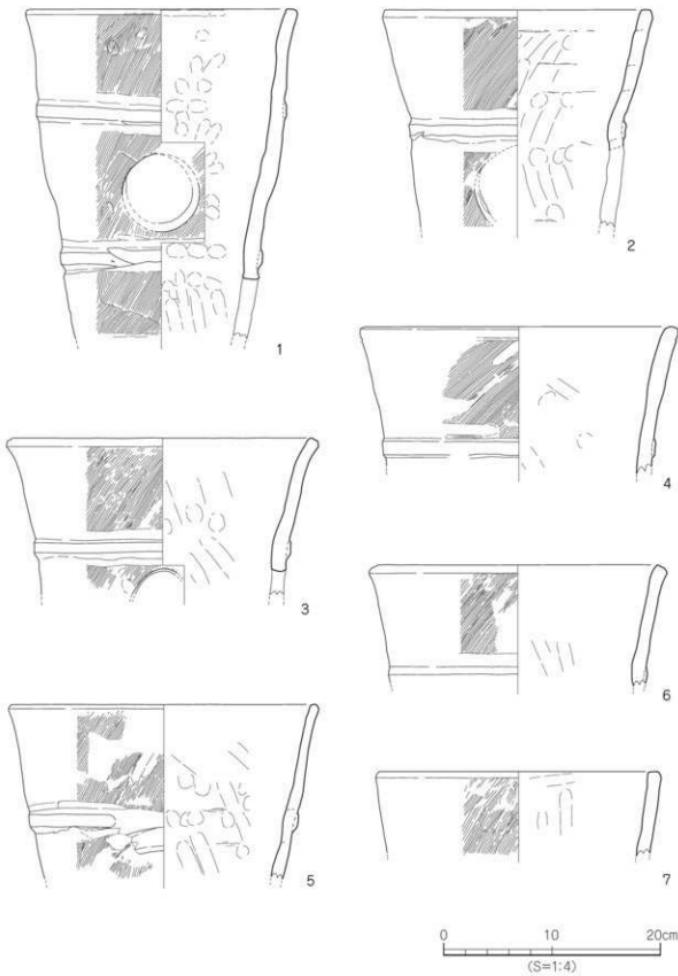
14~15は坏蓋。14は扁平な天井部に、丸味のある断面三角形状の稜をもつ。口縁端部は、内傾する面をなす。15は口縁部が下方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に仕上げる(8世紀前半)。16は高台の付く坏で、高台は体底部境界より内側に付き、「ハ」の字状に開く(7世紀後半)。17は短頭壺の蓋。1/2の残存で、天井部と口縁部の境界には四線状の凹みが巡り、口縁部は外方に肥厚し、口縁端部は凹面をなす。18は短頭壺。1/2の残存で、口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。肩部の張りは強く、胴部中位に回転カキメ調整を施す。底部外面には、回転ヘラケズリ調整がみられる。19~20は広口壺。19は復元完品で、口径10.9cm、器高16.4cmである。口縁部は方形状に肥厚し、口縁端部は内方へ僅かに拡張する。胴下半部外面には、平行叩きが部分的に施されている。なお、内面はナデにより、叩き痕がスリ消されている。色調は、内外面共に灰色である。20は口縁部の1/3を欠損するもので、口縁部には歪みがある。推定口径14.6cm、器高21.7cmで、口縁部は方形状に肥厚し、胴下半部外面には平行叩きを施す。色調は、内外面共に暗灰色である。21は壺で、口縁部を一部欠損する。胴部最大径12.3cmで、肩部には沈線1条が巡り、刺突列点文が描かれている。底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。

土師器(22~23)

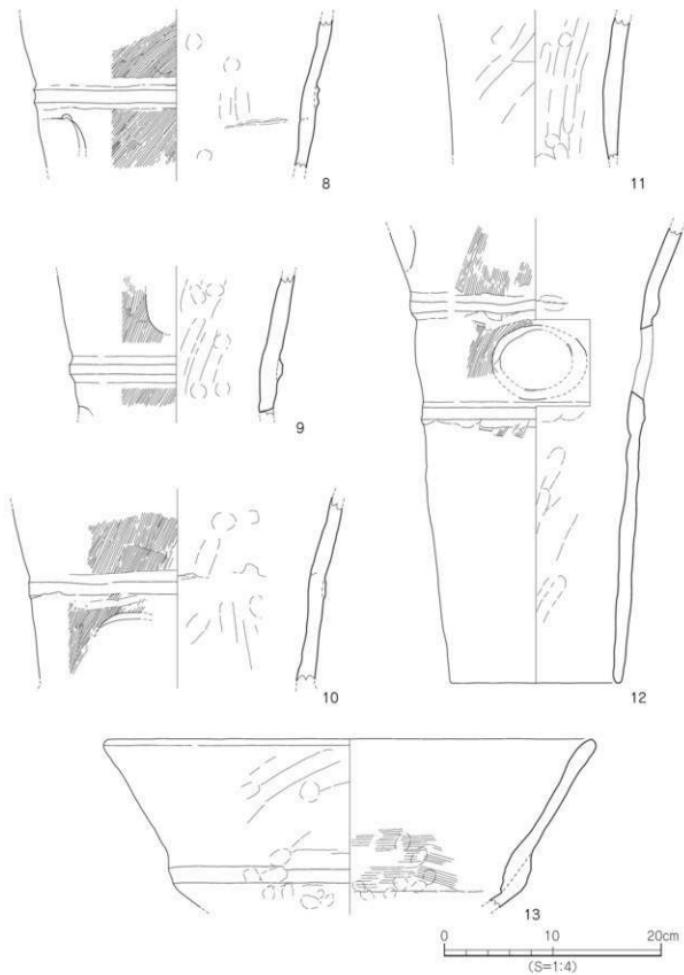
22は土師器壺の小片。口縁部は内湾し、口縁端部は尖る。23は口縁部を一部欠損するものの、ほぼ完形の坏で、口径10.1cm、底径6.2cm、器高3.2cmである。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。底部外面には、回転糸切り痕を残す。色調は内外面共に浅黄色で焼成はあまく、胎土中に石英や長石を大量に含む。

瓦器(24)

24は和泉型瓦器椀の底部。小片で、丸味のある断面三角形状の高台が付く。底部内面には、暗文が施されている。13世紀。



第10図 周溝1出土遺物実測図(1)

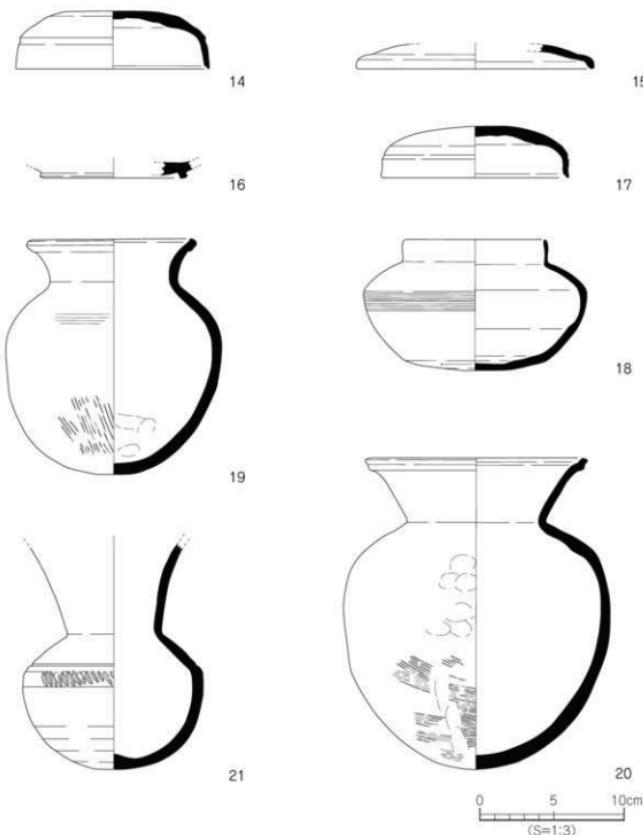


第11図 周満1出土遺物実測図(2)

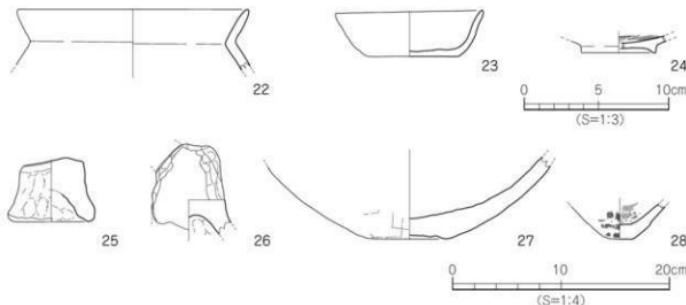
弥生土器 (25 ~ 28)

25・26は支脚形土器。25は台形状の支脚で、脚部は凹む。26は本来、角状突起をもつ支脚で、背面にヒレ状の突起が付く。27は壺形土器、28は壺形土器の底部で、27は上げ底、28は平底である。外面には指顎痕を残し、色調は茶褐色を呈する。

時期：出土遺物の特徴から、古墳の構築時期は古墳時代後期中葉、6世紀中頃と考えられる。



第12図 周溝1出土遺物実測図 (3)



第13図 周溝1出土遺物実測図(4)

2. 溝

SD1 (第14図)

調査区南西部D1区で検出した南北方向の溝で、溝北側は第IV層上面、溝南側は周溝1上面での検出である。SD1西側は2基の柱穴〔SP6・8 (埋土: 浅黄色土)〕に切られ、溝南端は調査区外へ続く。調査区南壁の土層観察によりSD1は第II層上面から掘削されており、溝上面を第I③層が覆う。規模は検出長3.90m、幅0.22m、深さ12cmを測る。

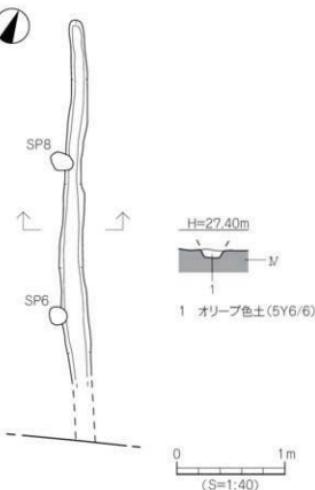
断面形態はレンズ状を呈し、埋土はオリーブ色土(5Y 6/6)単層である。溝底面は、僅かに北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差2cm)。溝内から、遺物は出土していない。

時期: 遺物は出土していないが、近世の堆積層である第II層上面から掘削されていることから、SD1は概ね近世、もしくは近世以降の溝と考えられる。

3. 土坑

SK1 (第15図)

調査区南西部D2区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外へ続く。SK1は第IV層上面で検出し、土坑上面を第I③層が覆う。平面形態は長方形を呈し、規模は南北検出長0.88m、東西長0.70m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は明黄褐色土(75YR 5/8)単層である。SK1基底面は、ほぼ平坦である。土坑内から、遺物は出土していない。



第14図 SD1測量図

時期：遺物の出土はないが、埋土が周溝1と酷似することや検出層位より、SK1は概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

SK2（第16図）

調査区南西部D2区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外へ続く。第IV層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第I③層上面から掘削された土坑である。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長0.98m、東西長0.98m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色土（5Y 5/2）単層である。土坑内からは、陶磁器の小片が数点出土した。

時期：出土した陶磁器の特徴より、SK2は近世の土坑と考えられる。

SK3（第16図）

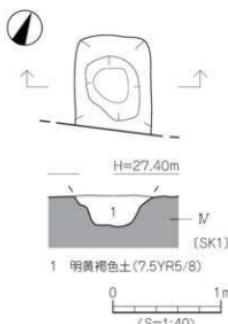
調査区南部D2・3区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外へ続く。第IV層上面での検出であるが、本体は第I③層上面から掘削された土坑である。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.06m、東西長0.96m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色土（5Y 5/2）単層である。SK3基底面は、ほぼ平坦である。土坑内から、遺物は出土していない。

時期：SK2と埋土が酷似していることから、SK3は概ね近世の土坑と考えられる。

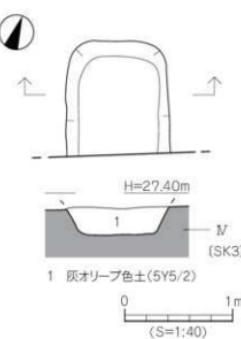
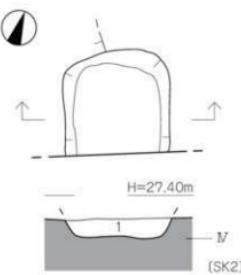
SK4（第17図）

調査区中央部西側C2区で検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈し、規模は長径1.08m、短径長0.76m、深さ13cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色土（5Y 5/2）単層である。SK4基底面は、ほぼ平坦である。土坑内から、遺物は出土していない。

時期：遺物の出土はないが、SK2やSK3と埋土が酷似していることから、SK4は概ね近世の土坑と考えられる。



第15図 SK1測量図



第16図 SK2-SK3測量図

SK5 (第 17 図)

調査区南部 D3 区で検出した土坑で、土坑北側は近現代坑に切られ、南側は調査区外へ続く。第IV層上面での検出であるが、本来は第 I (3) 層上面から掘削された土坑である。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長 0.28 m、東西長 0.98 m、深さ 10cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色土 (5Y 5/2) 単層である。SK5 基底面は、ほぼ平坦である。土坑内からは、遺物は出土していない。

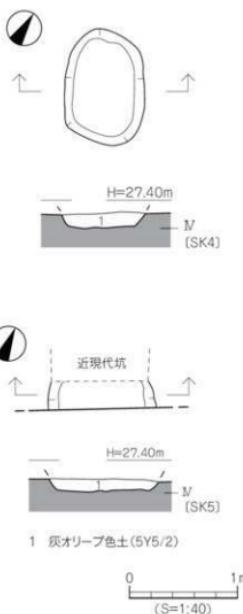
時期：遺物の出土はないが SK2 や SK3 と埋土が酷似していることから、SK5 は概ね近世の土坑と考えられる。

SK6 (第 18 図、図版 6-7)

調査区北東部 B3 区に位置する土坑で、周溝 1 の基底面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 3.05 m、短径 1.65 m、深さ 40cm を測る。SK6 基底面は、中央部が凹む。断面形態は鉢状を呈し、埋土は 4 層に分層でき、1 層：にぶい橙色土 (7.5YR 6/4)、2 層：にぶい褐色土 (7.5YR 5/4)、3 層：灰褐色粘質土 (7.5YR 5/2) に明黄褐色土 (10YR 7/6) が斑点状に混入、4 層：灰褐色粘質土 (7.5YR 5/2) に明黄褐色土 (10YR 7/6) がブロック状に混入である。土坑内からは土師器片や須恵器片、埴輪片のはか石器が出土した。

出土遺物 (第 19 図、図版 10)

29 ~ 31 は円筒埴輪。29 は、口縁部の一部を欠損する。推定口径 26.0cm で、口縁部は僅かに外反し、口縁端部はナデ凹む。中央部が凹む断面台形状の突帯 2 条を貼り付け、突帯間と突帯上方に円孔 (径 7cm) 2 個を穿つ。なお、突帯の上下には板状工具による押圧がみられる。外面は右ナナメ上がりのハケメ調整を施し、内面には指オサエとナデが部分的にみられる。土師質で焼成はあくま、胎土中には石英や長石のほか黑色酸化土粒が多く含まれている。色調は内外面共に、にぶい黄橙色である。30 は小片で、推定口径 26.6cm である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部はナデ凹む。口唇部内面には強いヨコナデが施され、口縁部内面にはヨコ方向のハケメ調整がみられる。外面には、右ナナメ上がりのハケメ調整が全面に施されている。焼成は良好で、色調は内外面共に、にぶい橙色である。31 は 1/6 の残存で、胴部最大径 25.8cm である。丸みのある断面台形状の突帯を貼り付け、突帯の上下に円孔を穿つ。外面には右ナナメ上がりのハケメ調整、内面は指オサエやナデを施す。須恵質で硬く、焼成は良好であり、色調は内外面共に灰褐色である。32 は朝顔形埴輪で、口縁部は欠損する。1/5 の残存で、最大径 30.7cm である。坏部屈曲部には丸みのある断面台形状の突帯を貼り付け、突帯の上下には強いナデを加える。焼成はあくま、胎土中に石英や長石のほか赤色酸化土粒を多く含む。33 は盾形埴輪で、盾面の側辺部を基部に貼り付けて



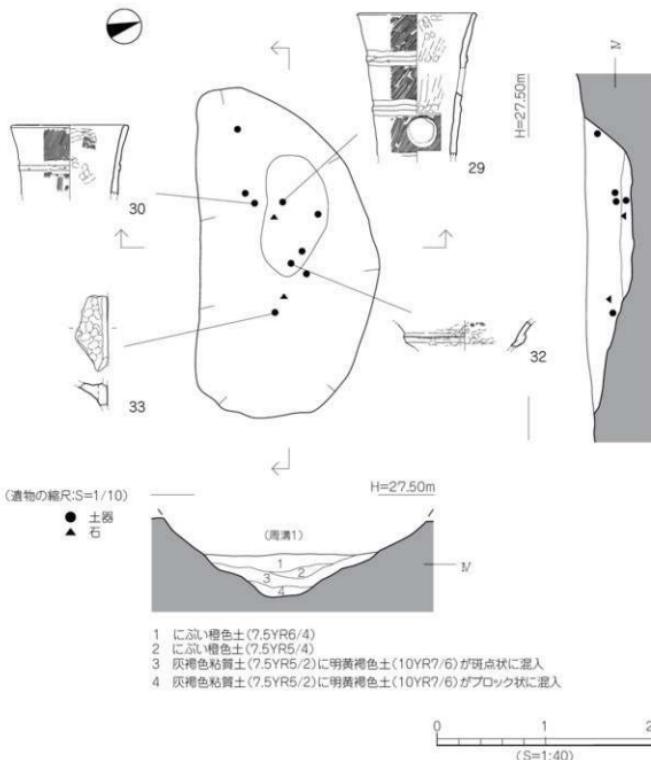
第 17 図 SK4・SK5 測量図

いる。焼成はあまり、胎土中に赤色酸化土粒を多く含む。土質質で、色調は内外面共に橙色である。

時期：検出状況と出土遺物の特徴から、SK6は古墳時代後期中葉以前の土坑と考えられる。

SK7（第20図、図版7）

調査区南東部C・D4区に位置する土坑で、土坑南側は調査区外に続き、土坑上面は周溝1が覆う。平面形態は橢円形を呈し、規模は東西検出長3.42m、南北検出長2.26m、深さ16cmを測る。断面形

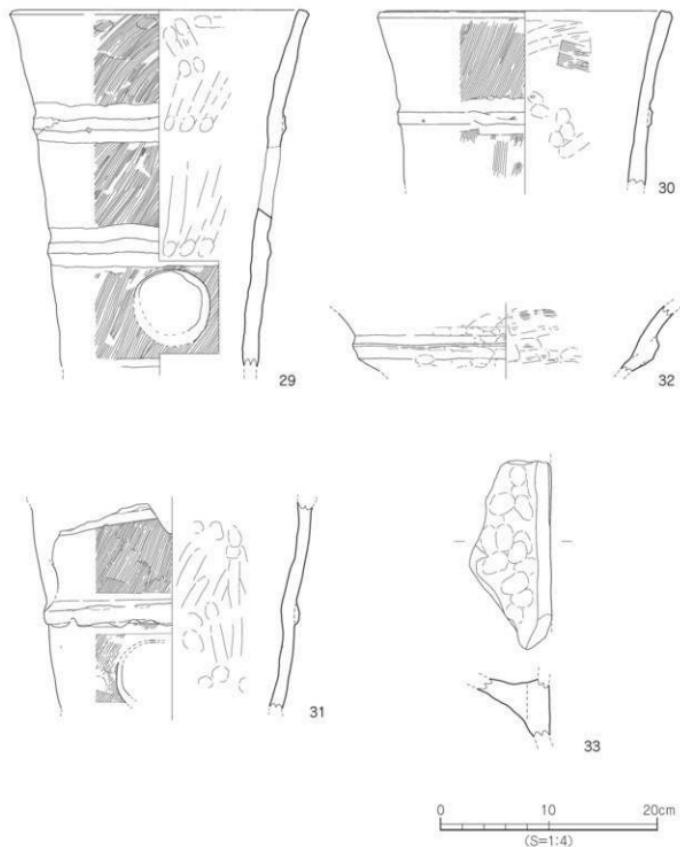


第18図 SK6測量図

造構と遺物

態は逆台形状を呈し、埋土は明黄褐色土（10YR 6/6）単層である。SK7 基底面は、北東から南西に向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は、土師器片と石器が出土した。

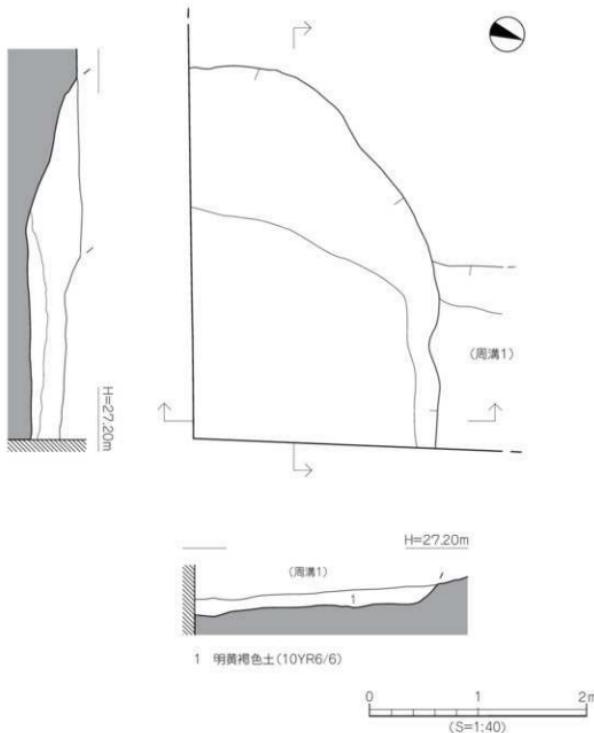
時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、検出状況から、SK7 は周溝構築以前、概ね古墳時代後期中葉以前の土坑と考えられる。



第 19 図 SK 6 出土遺物実測図

4. 柱穴

調査では遺構検出時や周溝掘り下げ時に28基の柱穴を検出したが、1基(SP25)は調査中に消失したことから、最終的には27基を検出した。このうち、周溝基底面からは21基の柱穴を検出した。柱穴掘り方の平面形態は円形と楕円形があり、規模は径10~24cm、深さ5~35cmを測る。柱穴掘り方埋土は、以下の6種類（埋土A・B・C・D・E・F）である。埋土Aは灰褐色土(7.5YR 6/2)に砂が混入するもので、4基の柱穴(SP1・20・24・28)を検出した。埋土Bは灰黄褐色土(2.5YR 6/1)に明黄褐色土(10YR 7/6)がブロック状に少量混入するもので、3基の柱穴(SP2・5・27)を検出し、埋土Cはオリーブ灰色土(5Y 6/6)に灰黄色土(2.5Y 7/2)がブロック状に混入するもので、柱穴1基(SP3)を検出した。埋土Dは浅黄色土(2.5Y 7/3)で、全体の約6割となる15基の柱穴(SP4・



第20図 SK7測量図

6～18・26) を検出した。埋土 E は、にぶい橙色土 (7.5YR 7/3) に砂が少量混入するもので、柱穴 1 基 (SP19) を検出し、埋土 F はにぶい褐色土 (7.5YR 5/3) に砂が混入するもので、3 基の柱穴 (SP21～23) を検出した。なお、各柱穴内から遺物は出土しなかった (表 5)。

埋土 A : 灰褐色土 (7.5YR 6/2) 砂混入	4 基 [SP1・20・24・28]
埋土 B : 灰黄褐色土 (2.5YR 6/1) に明黄褐色土 (10YR 7/6)	3 基 [SP2・5・27] がブロック状に少量混入
埋土 C : オリーブ灰色土 (5Y 6/6) に灰黄色土 (2.5Y 7/2)	1 基 [SP3] がブロック状に混入
埋土 D : 浅黄色土 (2.5Y 7/3)	15 基 [SP4・6～18・26]
埋土 E : にぶい橙色土 (7.5YR 7/3) 砂が少量混入	1 基 [SP19]
埋土 F : にぶい褐色土 (7.5YR 5/3) 砂混入	3 基 [SP21～23]

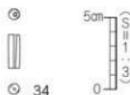
5. その他の遺構と遺物

調査では、近現代坑や重機掘削時に遺物が出土した。特に、重機掘削時は出土地点や層位が不明であるため、「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

(1) 近現代坑出土遺物 (第 21 図、図版 10)

34 は、遺構検出時に存在した近現代坑を掘削した際の出土品。

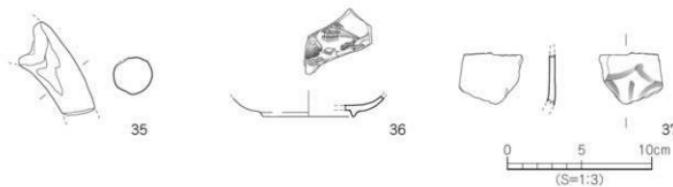
管玉の完存品で、長さ 2.3cm、直径 0.8cm、重さ 2.66g を測る。中央部より外側の位置に孔を穿ち、孔径は 1～2mm を測る。碧玉製で、色調は濃緑色を呈する。



第 21 図 近現代坑出土遺物実測図

(2) 地点不明出土遺物 (第 22 図)

35 は土師器土釜の脚部で、方形状の底部をもち、断面形態は円形である。36 は陶器の碗で、外面には文様が描かれている。胎土は灰白色で、内外面には透明釉が掛けられている。37 は磁器の皿で、断面三角形状の高台が付く。内面には風景画が描かれており、胎土は灰白色で、内外面には透明釉が掛けられているが、高台疊付部分は無釉である。



第 22 図 地点不明出土遺物実測図

第4節 小 結

調査では古墳時代と近世の遺構と、弥生時代から近世までの遺物を確認することができた。ここでは、時代別に概要をまとめる。

(1) 弥生時代

明確な遺構は検出されなかったが、周溝1条から末に時期比定される壺形土器や壺形土器、支脚形土器の破片が数点出土した。これらは本来、流入品と考えられることから、調査地近隣地域に存在する弥生集落に関連した遺物といえる。

(2) 古墳時代

遺構は、周溝1条と土坑3基(SK1・6・7)を検出した。このうち、周溝は『衣山西ノ岡古墳』に伴うもので、本古墳は推定径17m以上を測る円墳と思われ、出土遺物より古墳時代後期中頃の築造と考えられる。周溝内からは弥生土器や土師器、須恵器、埴輪のほか、石器が出土した。また、土坑SK6からは土師器や須恵器、埴輪、石器が出土したほか、SK7からは土師器と石器とが出土した。

これまで、衣山地区での発掘調査事例は少なく、集落や古墳の様相は不明な点が多い。今回の調査で古墳が発見された事は、調査地近隣地域にも古墳が存在する可能性が高いことを物語るものである。

(3) 古代

遺構は検出されなかったが、周溝内からは奈良時代の須恵器や平安時代の土師器が出土した。平成20年度に発掘調査を実施した衣山北組遺跡でも同時期の遺構や遺物が出土しており、これらの遺物は衣山地区において、広範囲に古代集落が営まれていたことを示唆する資料といえよう。

(4) 中・近世

中世の遺構は未検出であるが、周溝内や近現代坑の掘削時に室町時代、14～15世紀に時期比定される土師器の壊や土釜の破片が出土した。なお、周溝からは13世紀の瓦器壇の破片が出土している。近世では、溝1条(SDI)と土坑4基(SK2～5)を検出した。遺物はSK2から、江戸時代後期の陶磁器片が少量出土した。これらのことから、調査地や近隣地域には中世から近世にかけての遺跡が存在しているものと思われる。

今回の調査では、古墳に伴う周溝や弥生時代から近世までの遺物を確認することができた。今後は衣山地区的発掘調査を進めていく上で、集落遺跡はもとより、古墳の構造や範囲確認をすることにより、衣山地区における古墳の分布や変遷を解明する必要がある。

遺構一覧

遺構一覧・遺物観察表　－凡例－

以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 ()：現存検出長を示す。

埋土欄 複数の埋土がある場合 → 例)「黒褐色土 他」と記載。

出土遺物欄 土器の名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶磁器、石→石器

(2) 遺物観察表

法量欄 ()：復元推定値

調整欄 土器の各部位名を略記した。

例) 底→底部、天→天井部、口→口縁部、体→体部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒、密→精製土

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(3) → 「1~3mmの大の石英、長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好、○→良、△→不良

表2 固溝一覧

固溝	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B2~D4	円形	レンズ状	(17.00) × 2.40 × 0.50	黄褐色土 他	弥生・土師 須恵・埴輪	古墳後期中葉	

表3 溝一覧

溝(SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D1	南北	レンズ状	(3.90) × 0.22 × 0.12	オリーブ色土	-	近世以降	

表4 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D2	長方形	逆台形状	(0.88) × 0.70 × 0.28	明黄褐色土	-	古墳後期	
2	D2	長方形	逆台形状	(0.98) × 0.98 × 0.18	灰オリーブ色土	陶磁	近世	
3	D2・3	長方形	逆台形状	(1.06) × 0.96 × 0.25	灰オリーブ色土	-	近世	
4	C2	稍円形	逆台形状	1.08 × 0.76 × 0.13	灰オリーブ色土	-	近世	
5	D3	長方形	逆台形状	0.98 × (0.28) × 0.10	灰オリーブ色土	-	近世	
6	B3	稍円形	櫛鉢状	3.05 × 1.65 × 0.40	にぶい橙色 他	土師・須恵 埴輪・石	古墳後期中葉	固溝1基底面
7	C・D4	稍円形	逆台形状	(3.42) × (2.26) × 0.16	明黄褐色土	土師・石	古墳後期中葉以前	

表5 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
1	B1	円形	(0.18) × (0.18) × 0.12	灰褐色土	-	
2	D1	円形	0.14 × 0.14 × 0.22	灰黄褐色土 (明黄色土混入)	-	
3	D1	円形	0.17 × 0.17 × 0.35	オリーブ色土 (灰黄色土混入)	-	
4	D1	円形	0.18 × 0.18 × 0.13	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
5	D1	円形	0.18 × 0.18 × 0.18	灰黄褐色土 (明黄色土混入)	-	周溝1上面検出
6	D1	円形	0.16 × 0.16 × 0.10	浅黄色土	-	
7	D1	円形	0.18 × 0.18 × 0.18	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
8	D1	椭円形	0.24 × 0.14 × 0.10	浅黄色土	-	
9	D1	円形	0.16 × 0.15 × 0.10	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
10	D1	椭円形	0.18 × 0.14 × 0.07	浅黄色土	-	
11	C1	円形	0.12 × 0.12 × 0.06	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
12	C1	円形	0.11 × 0.10 × 0.10	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
13	C1	椭円形	0.20 × 0.18 × 0.18	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
14	C1	円形	0.10 × 0.09 × 0.20	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
15	C1	円形	0.10 × 0.10 × 0.12	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
16	C1	円形	0.12 × 0.11 × 0.20	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
17	C1	円形	(0.10) × 0.16 × 0.20	浅黄色土	-	
18	C1	円形	0.12 × 0.11 × 0.14	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
19	C2	円形	0.14 × 0.13 × 0.06	にぶい橙色土	-	周溝1基底面検出
20	C2	円形	0.22 × 0.22 × 0.08	灰褐色土	-	周溝1基底面検出
21	B2	円形	0.11 × 0.10 × 0.20	にぶい褐色土	-	周溝1基底面検出
22	B2	円形	0.17 × 0.16 × 0.22	にぶい褐色土	-	周溝1基底面検出
23	B2	円形	0.10 × 0.10 × 0.06	にぶい褐色土	-	周溝1基底面検出
24	B2	円形	0.12 × 0.12 × 0.10	灰褐色土	-	周溝1基底面検出
25				欠番		
26	B4	円形	0.18 × 0.16 × 0.12	浅黄色土	-	周溝1基底面検出
27	B4	円形	0.13 × 0.13 × 0.10	灰黄褐色土 (明黄色土混入)	-	周溝1基底面検出
28	D4	円形	0.20 × 0.20 × 0.12	灰褐色土	-	

遺物観察表

表6 固溝1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) 〔内面〕	胎 土 焼 成	備 考	回版
				外 面	内 面				
1	円筒	口径 (25.0) 残高 34.0	断面台形状の突帯 2 条を貼付け、径 7.2cm 大の円孔を穿つ。土師質。	ハケ (5~6 本/cm)	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		8
2	円筒	口径 (24.6) 残高 20.1	断面台形状の突帯を貼付け、円孔を穿つ。口縁端部は面をなす。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ・指オサエ	にぶい褐色 明黄褐色	石・長 (1~5) ○		8
3	円筒	口径 (27.4) 残高 14.5	断面台形状の突帯を貼付け、円孔を穿つ。L6 の残存。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	褐色明 黄褐色	石・長 (1~3) ○		8
4	円筒	口径 (28.0) 残高 16.1	丸柱のある断面台形状の突帯を貼付ける。口縁部はやや歪む。L4 の残存。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ・指オサエ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		8
5	円筒	口径 (28.2) 残高 13.5	断面台形状の低い突帯を貼付ける。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	にぶい褐色 明黄褐色	石・長 (1~3) ○		8
6	円筒	口径 (25.6) 残高 11.2	断面台外縁部の面をもつ。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ (マメフ)	明黄褐色 明黄褐色	石・長 (1~4) ○		
7	円筒	口径 (25.6) 残高 7.8	口縁端部は面をなす。小片。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長 (1~3) ○		
8	円筒	残高 13.8	断面台形状の突帯を貼付け、円孔を穿つ。L6 の残存。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ (マメフ)	にぶい褐色 明黄褐色	石・長 (1~5) ○		8
9	円筒	残高 12.9	断面台形状の突帯を貼付け、円孔 2ヶ を看取る。L3 の残高。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	褐色 明黄褐色	石・長 (1~5) ○		8
10	円筒	残高 15.8	断面台形状の突帯を貼付け、円孔を穿つ。L4 の残存。土師質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~4) ○		8
11	円筒	残高 13.1	1/4 の残存。土師質。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		
12	円筒	底径 (15.6) 残高 41.9	丸柱のある断面台形状の突帯を貼付け、円孔を穿つ。L4 の残存。須恵質。	ハケ (6 本/cm)	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~4) ○		9
13	羽根形 埴輪	口径 (44.4) 残高 15.5	口縁部はカギ形に反し、幅曲線の台形状の突帯を貼付ける。L6 の残存。土師質。	ナデ	ハケ (5 本/cm)	褐色 褐色	石・長 (1~3) 赤△		9
14	环蓋	口径 (13.2) 器高 4.0	扁平な大井戸丸みのある断面三角形の突帯を貼付ける。口縁部は内傾する。	回転ヘラケズリ 回転ナデ		オリーブ灰 褐色	密 ○		9
15	环蓋	口径 (16.2) 残高 1.7	口縁部は下方に屈曲し、口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ		灰白色 灰白色	密 ○		
16	坏	底径 (10.1) 残高 1.2	丸柱による開口。体底部境界より内側に付く。	回転ナデ		灰白色 灰白色	密 ○		
17	蓋	口径 (13.0) 器高 3.6	初頭部の蓋。口縁端部は内傾する前面を持つ。	回転ヘラケズリ 回転ナデ		灰色 灰色	密 ○		9
18	短颈壺	口径 (9.6) 器高 9.1	「肩縁部は斜ぐ内側」、「肩縁部は内側」。肩縁部は内傾する。内側に斜め調整を施す。完形成。	回転ナデ・カキメ 回転ヘラケズリ		灰色 灰色	密 ○		
19	広口壺	口径 10.9 器高 16.4	口縁部は長方形形に肥厚し、肩部は内方で肥厚する。完形成。	手印押さ 回転ナデ		灰色 灰色	密 ○		9
20	広口壺	口径 (14.6) 器高 21.7	口縁部は方形形に肥厚し、口縁部は全体的に歪んでいる。完形成。	手印押さ 回転ナデ		灰色 灰色	密 ○		9
21	鳳	残高 15.7	肩部に沈線 1 条と刺突弦文を施す。底部完形。	回転ナデ 回転ヘラケズリ		暗灰色 暗灰色	密 ○		9
22	甕	口径 (16.0) 残高 4.3	内凹口縁。口縁端部は尖り気味。小片。	マメフ	マメフ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		
23	坏	口径 10.1 底径 6.2 器高 3.2	完形成。体部は内済し、口縁端部は尖り気味。底部外面に回転糸切り痕。	マメフ	マメフ	浅黄色 浅黄色	砂粒 ○		10
24	桷	底径 (5.1) 残高 1.2	瓦器形。断面三角形状の高台が付く。内面に縮文あり。	マメフ	ミガキ	灰白色 灰白色	砂粒 ○		10
25	支脚	受部径 5.8 底径 (7.3) 器高 5.9	上げ底。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~5) 角閃石 ○		10
26	支脚	残高 8.3	角状突起部を欠損。	ナデ	ナデ	黄褐色 黒褐色	石・長 (1~3) 赤 ○		10

衣山西ノ岡古墳

表7 SK6出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	甕	底径 残高 6.4 7.5	上げ底。	マメフ	マメフ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ○		
28	甕	底径 残高 2.3 3.3	小さな平底。2/3の残存。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) 金 ○		
29	円筒 埴輪	口径 (26.0) 残高 32.8	中央部が四台形状の突帯を貼付け、口縁部はテ円むし、土師質。	ハケ (5~6本/cm)	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~4) ○	10	
30	円筒 埴輪	口径 (26.2) 残高 16.2	断面台形状の突帯を貼付け、口縁部はテ円むし、土師質。	ハケ (5~6本/cm)	ハケ→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		
31	円筒 埴輪	残高 19.0	丸味のある断面三角形状の突帯を貼付け、口元を穿つ。須恵質。	ハケ (6本/cm)	ナデ・指オサエ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	10	
32	側削形 埴輪	残高 6.0	台形状の突帯を貼付ける。1/5の残存。土師質。	ナデ	マメフ (ハケ)	褐色 褐色	石・長 (1~3) △	10	
33	盾形 埴輪	残高 13.1	小片。土師質。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) △	10	

表8 近現代坑出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長径 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)		
34	管玉	ほぼ完形	碧玉	0.80	2.30	0.15	2.66	

表9 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
35	土釜	残高 6.5	三足付土釜の脚部。断面円形。	マメフ	-	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		
36	碗	底径 (6.2) 残高 1.4	磁器。内面に風景文あり。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		
37	碗	残高 3.6	磁器。内面に風景文あり。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		

第3章 衣山大塚北遺跡

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

本調査は、松山市の埋蔵文化財包蔵地『No.40 水塚古墳』内における宅地開発に伴う事前調査である。2003（平成15）年5月16日、大栄ハウス株式会社より衣山二丁目520番、521番1、521番2、521番3、524番、525番、527番2における埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という）に提出された。それを受けて文化財課では、埋蔵文化財の有無や遺跡の範囲を確認するため試掘調査を行う事となった。試掘調査は、文化財課が同年6月と8月に実施した。その結果、申請地の南西部で弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構及び遺物が確認され、申請地の一部について発掘調査が必要と判断された。

2011（平成23）年8月2日、申請地内の開発にあたり、株式会社ミツワ都市開発、渡辺設計事務所（以下、申請者という）と財團法人松山市文化・スポーツ振興財團 埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという）は、発掘調査についての協議をおこない、開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存のため本格調査を実施する事となった。発掘調査は、申請者と埋蔵文化財センターが委託契約を結び、平成23年9月22日より調査を開始した。

2. 周辺の遺跡

申請地は、昭和60年度に横穴式石室や周溝などの調査が行われた水塚古墳の西方約50mに位置する。調査地の南西約70mには平成20年度に調査が行われた衣山北組遺跡があり、弥生時代から古代の遺構・遺物が見つかっている。平成23年度には、衣山西ノ岡古墳の調査が行われ埋葬施設は検出されなかったが古墳に伴うと考えられる周溝のほか、土坑や柱穴などの遺構を検出し、埴輪、土師器、須恵器、石器、管玉などが出土している。このほか、伊予鉄衣山駅から約200m西の沿線の北側には古代の衣山瓦窯があり、大正14年に発見された瓦には複弁蓮華文、重弧文の軒丸瓦など貴重な遺物が見つかっている。

3. 調査組織

所在地：松山市衣山二丁目521番1の一部

調査面積：約25m²

調査期間：2011（平成23）年9月22日（木）～2011（平成23）年10月14日（金）

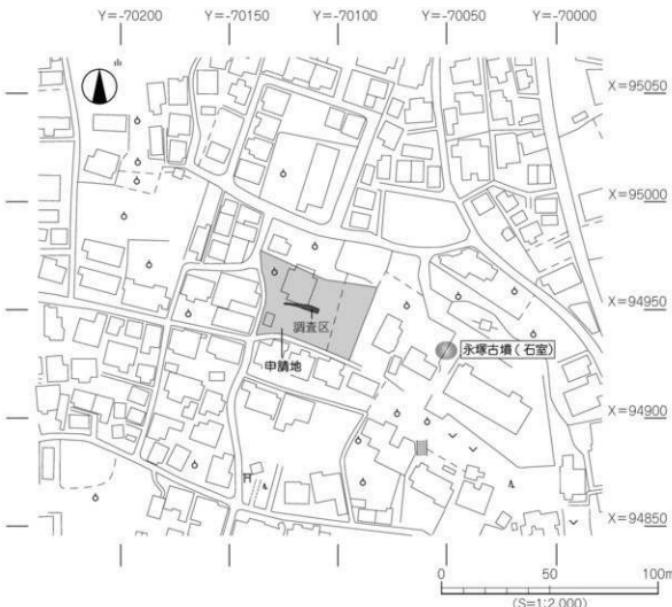
調査主体：財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター 相原 浩二（調査担当）

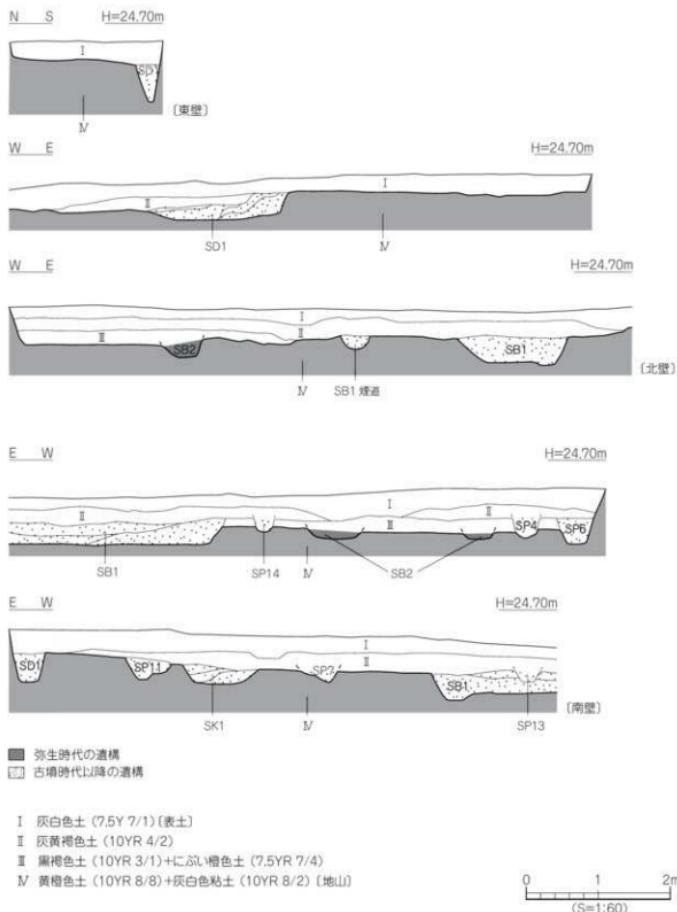
大西 朋子（写真担当）

第2節 層位（第24図）

調査地の現況は、造成地である。衣山地区の東側丘陵部に立地し、申請地の中央部付近が東西にかけての尾根筋となり東側に緩く傾斜する。標高は、2410～2450mを測る。調査区の基本層序は上から第Ⅰ層灰白色土（表土）、第Ⅱ層灰黄褐色土、第Ⅲ層黒褐色土+にぶい橙色土、第Ⅳ層黄橙色土+灰白色粘土（地山）である。第Ⅱ層は厚さ12～24cmを測り、弥生時代から古墳時代の遺物を包含するが、遺物量は少ない。第Ⅲ層は調査区の西側に遺存し、厚さは10～20cmを測る。弥生土器の小片を包含し、層中から遺構が掘られる。第Ⅳ層は地山と呼ばれる層であり、北東部から南西方向に緩く傾斜をする。調査区の北東部側は、水平に削平されている。遺構の検出は、この第Ⅳ層上面で行った。



第23図 調査区位置図



第24図 土層図

第3節 遺構と遺物

検出した遺構は竪穴建物2棟、土坑1基、溝1条、柱穴14基を検出した。(第25図、図版12) 遺物は弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

1. 弥生時代

(1) 竪穴建物 (SB)

SB2 (第25・26図、図版13)

調査区西側で検出した、幅の広い周壁溝をともなう竪穴建物である。建物北側の一部分の検出で、南側の大部分が調査区外となり全容は不明である。埋土は、黒褐色土で第Ⅲ層と同色である。土層観察より、第Ⅲ層中から掘られたものである。平面形は検出状況から方形、ないし長方形になると考えられる。壁体の検出規模は北側180cm、西側98cm、壁高は床面から2~3cmを測る。周壁溝は幅0.33~0.47m、深さ0.05~0.11mを測る。遺物は、弥生時代後期と考えられる土器の小片が出土しているが図示できるものはない。

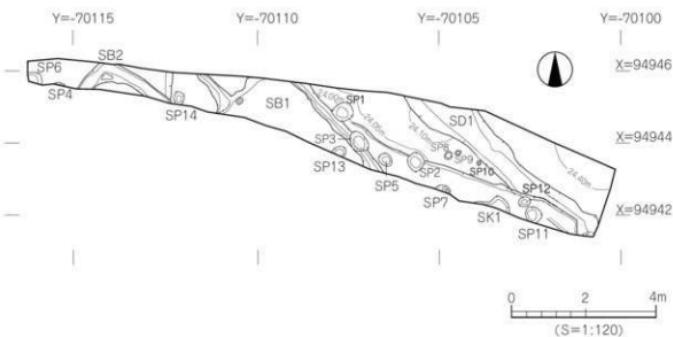
時期：出土遺物より、弥生時代後期後葉以降と考える。

2. 古墳時代

(1) 竪穴建物 (SB)

SB1 (第25・27図、図版13)

調査区中央部、第Ⅳ層上面で検出した。北側、南側は調査区外となり全容は不明となる。平面形態は、検出状況から長方形、ないし方形を呈するものと考えられる。壁体の検出規模は北側4.6m、西側1.70



第25図 遺構配置図

m、壁高 0.24 ~ 0.33 m を測る。検出時の埋土色は、灰黄褐色土である。住居に伴う施設として周壁溝、煙道と考えられる小溝を検出した。柱穴、貼床、カマド等の火の使用跡は未検出である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

周壁溝 壓穴建物の北壁沿いで検出したが、西壁では検出しなかった。検出規模は幅 20 ~ 32cm、深さ 1 ~ 3cm を測る。

煙道 第 IV 層上面で検出した。住居の北壁からのびて北側が一部調査区外となる。検出規模は長さ 115cm、幅 20 ~ 45cm、深さ 4cm を測る。埋土色は、住居埋土と同じ灰黄褐色土である。

出土遺物 (第 28・29 図、図版 14)

1・2 は土師器の壺。1 の口縁部は肥厚し、端部は丸くおさめる。2 の口縁端部はやや肥厚して、丸くおさめる。3 は須恵器の壺。底部は平底で、口縁端部は短く外方に開く。4 は須恵器の高壺。壺部と脚部の接合部である。5 ~ 10 は弥生土器。5 は複合口縁壺。口縁部外面に波状文を施す。6 は壺の底部。7 ~ 9 は甕形土器の底部。10 は支脚形土器。

時期：1 ~ 4 の出土遺物より、7 世紀前半には埋没したものと考えられる。

(2) 柱穴 (SP)

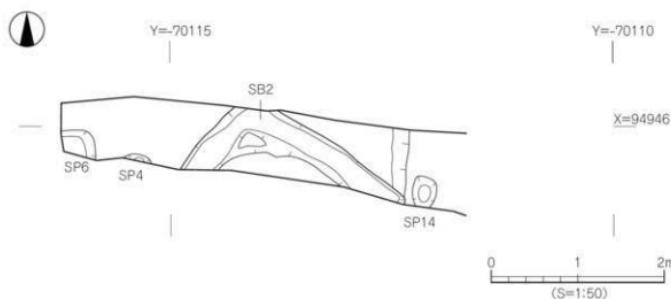
SP1 (第 25 図)

壓穴建物 SB1 を切る柱穴で、平面形は円形を呈する。検出規模は直径 53cm、深さ 48cm を測る。柱痕は検出していない。遺物は、遺構の時期に関係のない弥生土器が出土している。

出土遺物 (第 30 図)

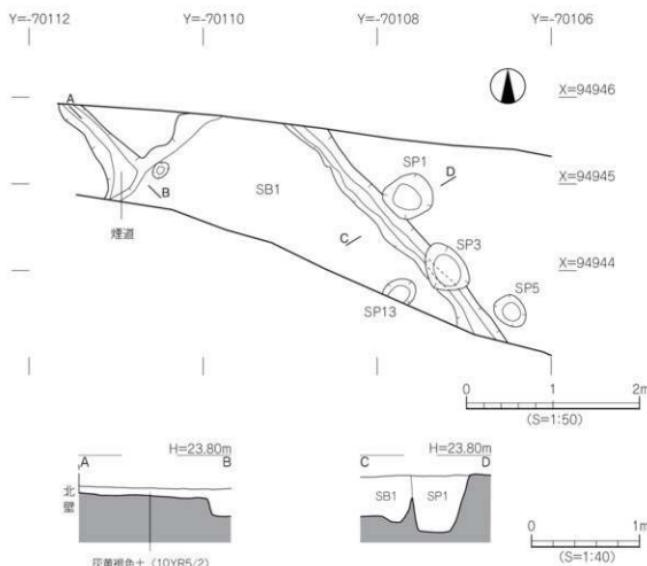
11 は無頭の直口壺。短く上方にのびる口縁部。12 は鉢形土器。口縁部は短く水平にのびる。

時期：SB1 との切り合い関係より、7 世紀前半以降と考えられる。

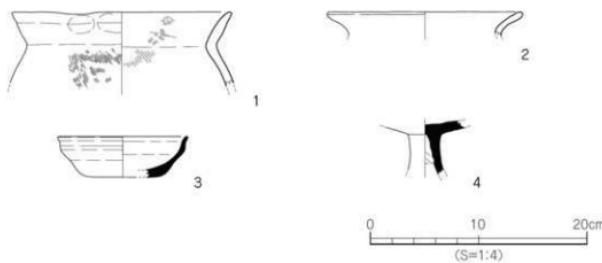


第 26 図 SB2 測量図

衣山大塚北遺跡



第27図 SB1測量図



第28図 SB1出土遺物実測図(1)

SP2（第25図）

平面形は、楕円形を呈する。検出規模は長軸54cm、短軸46cm、深さ23cmを測る。柱痕は、検出していない。遺物は、須恵器が出土している。

出土遺物（第30図、図版14）

13は壺蓋の口縁部片。稜は短く突出する。

時期：出土遺物より、6世紀前半と考えられる。

3. 土坑（SK）

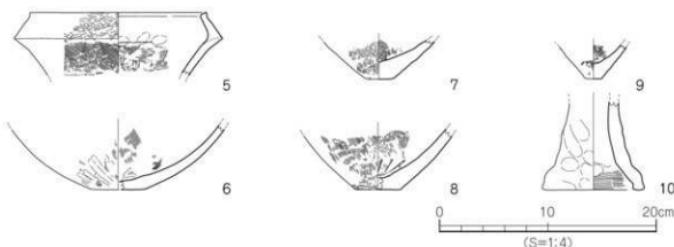
SK1（第25図）

調査区東部での検出である。南側は調査区外となり、全容は不明である。検出規模は長軸95cm、短軸33cm、深さ22cmを測る。遺物は、須恵器の坏身片が2点出土している。

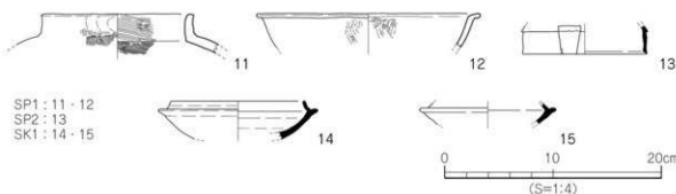
出土遺物（第30図、図版14）

14のたちあがりは内傾して、上方に短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。15のたちあがり端部は欠損する。

時期：出土遺物より、6世紀後半と考えられる。



第29図 SB1 出土遺物実測図（2）



第30図 SP1・SP2・SK1 出土遺物実測図

4. 溝 (SD)

SD1 (第 25・31 図)

調査区東部での検出であり、北西方向から南西方向へ直線的にのびる。検出規模は長さ 5.90 m、幅 0.65 m、深さ 0.10 ~ 0.41 m を測る。遺物は、須恵器が出土している。

出土遺物 (第 32 図、図版 14)

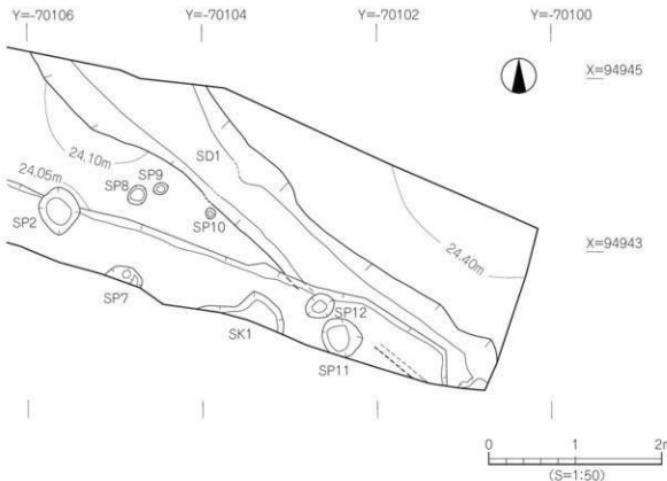
16 ~ 18 は坏蓋。いずれも稜は失われ、口縁端部は丸くおさめる。19 は坏身。たちあがりは、短く上方にのびる。

時期：出土遺物より、7世紀前半頃には埋没したものと考えられる。

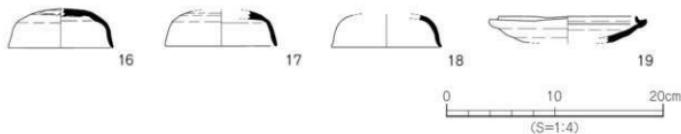
5. 表探

出土遺物 (第 33 図、図版 14)

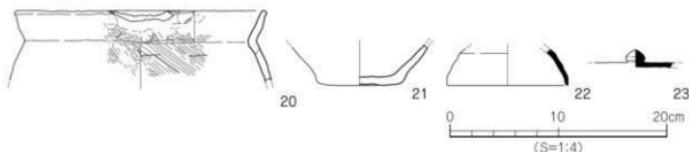
20 ~ 23 は重機で掘削中に出土した遺物で、出土層や位置が特定できない遺物である。20 は弥生後期の壺形土器で、口縁部の一部が片口状を呈する。21 は土師器坏。22・23 は坏蓋。23 は宝珠つまみをもつ。



第 31 図 SD1 測量図



第32図 SD1出土遺物実測図



第33図 表探出土遺物実測図

第4節 小 結

今回の調査では、弥生時代と古墳時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代では竪穴建物1棟を検出し、古墳時代では竪穴建物1棟、溝1条、柱穴2基などの遺構を確認した。遺物では弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

弥生時代としたSB2からは、時期を明確にする遺物の出土は無かったものの、重機での掘削中や他の遺構の埋土中から弥生後期の土器が出土していることから、調査地周辺には弥生時代後期の集落の存在が推定される。なお、このSB2は年報では周溝状遺構としたが、全体像が不明なことから本報告では竪穴建物とした。

古墳時代末の竪穴建物SB1は、部分的な検出ではあったが、煙道と考えられる遺構を検出した。松山平野内では、同時期の煙道を伴う竪穴建物の検出例は少なく、竪穴建物の形態や煙道構築の過程を知る上で貴重な資料となるものである。ただし、煙道に付随する造りつけのカマドの様な施設の痕跡を検出できなかったことは今後の検討課題である。

溝SD1は、竪穴建物から約2.4mの東側に近接する。主軸方向は、北から約45度西へ傾き竪穴建物と平行して北西方向から南西方向にのびる。竪穴建物と溝は方向を同じにする事や、出土した須恵器の形式もTK43ないしTK209に比定できることから同時期に併存していたものと考えられる。溝の性格については、集落を区画する溝や排水を目的としたものなどが考えられる。

衣山丘陵の包蔵地『No.40 水塚古墳』は、これまで調査例は少なく数基の古墳の存在と古代の瓦窯が知られていたが、集落の様相については不明な点が多くあった。今回の調査成果や古代の掘立柱建物が見つかった衣山北組跡、奈良時代・平安時代の土器が見つかった衣山西ノ岡古墳の調査成果により、調査地及び周辺地域に弥生時代から古代の集落関連遺構が広く展開していることが確認された。

遺構一覧・遺物観察表　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

平面形 () : 推定値

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、天→天井部、肩→肩部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部。

胎土欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウムモ、赤→赤色土粒、密→精製土、褐→褐色粒。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~3) → 「1~3mmの大石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 10 墓穴建物一覧

墓穴 (SB)	平面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	内部施設				埋 土	出土遺物	時 期
			主柱穴 (本)	高床部	貼付床	炕 押道			
1	長方形	4.60 × (1.70) × 0.24 ~ 0.33	-	-	-	-	○	明黄褐色土 施 弥生土器、 土師器、須恵器	弥生後期段半 以降
2	方形	西側 0.92 × 0.40 ~ 0.58 × 0.77 東側 1.75 × 0.33 ~ 0.47 × 0.55 ~ 0.11	-	-	-	-	○	黒褐色土 施 弥生土器	7世紀前半

表 11 漢一覧

漢 (SD)	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1	逆台形	5.90 × 0.65 ~ 1.2 × 0.10 ~ 0.41	灰黄褐色土 施	土師器、須恵器	7世紀

表 12 土坑一覧

土坑 (SK)	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1	不整形	逆台形	0.95 × 0.33 × 0.22	黒褐色土 施	須恵器	6世紀

表 13 柱穴一覧

柱穴 (SP)	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	(1)
1	円形	0.53 × 0.48 × 0.48	灰黄褐色土	土師器、須恵器	7世紀前半
2	椭円形	0.54 × 0.46 × 0.23	灰黄褐色土	須恵器	6世紀前半
3	椭円形	0.62 × 0.45 × 0.34	灰黄褐色土	土師器、須恵器	
4	(円形)	0.63 × (0.08) × 0.65	灰黄褐色土	-	

遺構・遺物観察表

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	平面形	規 模		埋 土	出土遺物	時期	
		長径×短径	×深さ(m)				
5	梢円形	0.40 × 0.32	× 0.13	灰黄褐色土	土師器		
6	(円形)	0.43	× 0.24	灰黄褐色土	土師器		
7	(円形)	0.38	× 0.20	灰黄褐色土	—		
8	円形	0.23	× 0.05	灰黄褐色土	—		
9	円形	0.15	× 0.19	灰黄褐色土	—		
10	円形	0.11	× 0.06	灰黄褐色土	—		
11	円形	0.45	× 0.27	灰黄褐色土	土師器、須恵器		
12	円形	0.32	× 0.38	灰黄褐色土	弦文器、土師器		
13	(梢円形)	(0.29)	× 0.32	× 0.19	灰黄褐色土	—	
14	(梢円形)	0.34	× 0.26	× 0.20	灰黄褐色土	—	

表14 SB1 出土遺物観察表 土器品

番号	器種	法量 (cm)	形 塗・施 文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (20.2) 残高 6.8	やや外反する口縁部。端部はマツツ する。	◎ヨコナデ ◎ハケ (9~10本/cm) →ナデ	◎ハケ (9/cm) ◎ハケ5~6本/cm →ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) 馬 ○		4
2	甕	口径 (18.0) 残高 2.2	やや内溝して短く立ち上がる口縁部。 マツツ・ハカリ	マツツ・ハカリ	マツツ・ハカリ	にぶい黃褐色 明赤褐色	石・長(1~4)		4
3	坏	口径 (12.0) 残高 3.7	全体は内溝して立ち上がる。口縁部 は短く外反する。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰・暗灰色 灰白色	石・長(1~1) ○		4
4	高坏	残高 4.9	接合部の破片。	◎回転ナデ ケズリ	◎回転ナデ ケズリ	灰白色・灰白色	石・長(1~2) ○		4
5	甕	口径 (16.1) 残高 5.8	複合口縁部に撫拂波状文を施す。	◎ナデ→施文 ハケ (14本/cm) →ナデ	◎ナデ ハケ (14本/cm)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) 赤 ○		4
6	甕	底径 (5.0) 残高 6.0	底平の底部。外面にヘタミガキが施 される。	◎◎ハケ 9~10本/cm →ミガキ →ナデ	ハケ 9~10本/cm →ナデ	橙・黒 にぶい黃褐色	石・長(1~3) 馬 ○	黒斑	4
7	甕	残高 (4.9)	小さな平底。	◎回転ナデ ケズリ	◎回転ナデ ケズリ	灰白色・灰白色	石・長(1~2) ○		4
8	甕	底径 (4.3) 残高 5.6	小さな平底。	◎◎ハケ (14本/cm) ◎ハケ (13~14本/cm)	ハケ (10本/cm) →ナデ	にぶい黃褐色 灰白色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	4
9	甕	底径 (9.6) 器高 3.6	小さな平底。	◎回転→ハケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰白色	唐 長(2) ○		4
10	支脚	残高 8.1	中空。	◎ナデ (指掘机)	◎ハケ (10本/cm) 粘土絞り痕	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) ○		4
11	甕	口径 (14.0) 残高 3.6	口縁部は「く」字状に屈曲する。口 縁端部は面をもつ。	◎ナデ ◎ハケ 8~12本/cm	◎ハケ (8本/cm) ◎ハケ (11~12本/cm)	橙色 橙色	石・長(1~3) ○	SP1	4

表15 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
12	鉢	口径 (206) 残高 31	短く外方に開く口縁部。 →ナデ ②ハケ 9~10本/cm →ナデ ③ハケ 6~7本/cm →ナデ	①マメツ ④ハケ 6~7本/cm →ミガキ	褐色 褐色	微砂粒 ○	SPI 4		
13	环蓋	口径 (112) 残高 26	棱は短く鋭い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 石(2) ○	SP2 4	

表16 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	环身	口径 122 残高 35	たちあがりは内傾して、短く上方に のびる。	⑤回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 黄灰色	密 長(1~4) ○		4
15	环身	受部径 (126) 残高 20	たちあがりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 黄灰色	石・長(1) ○		4

表17 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
15	环身	受部径 (126) 残高 20	たちあがりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 黄灰色	石・長(1) ○		4
16	环蓋	口径 (127) 天井部は扁平。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1~3) ○			4
17	环蓋	口径 (9.6) 器高 36	口縁部は外方に開く。口縁端部は丸くおさめる。	⑤回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	密 長(2) ○		4
18	环蓋	口径 (10.1) 残高 3.2	口縁端部は短く外方に開く。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 長(1) ○		4
19	环身	口径 (127) 残高 24	たちあがりは内傾して短く上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1~3) ○		4

表18 表探出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
20	壺	口径 (22.4) 残高 66	口縁部は片口状を呈する。	①ハケ 5~7本/cm →ナデ ②ハケ (7本/cm)	②ハケ (5本/cm) →ナデ ③ハケ (5本/cm)	褐色 明赤褐色	石・長(1~3) 金 ○		4
21	壺	底径 (6.2) 残高 28	平底の底部。底部の切り離しは不明	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1) 金・微砂粒 ○		4
22	环蓋	口径 (11.0) 残高 34	口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 石(1) ○		4
23	环蓋	口径 (1.7) 残高 17	宝珠つまみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 石・長(1) ○		4

第4章 調査の成果と課題

本書で掲載した二遺跡からは、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。これまでに、松山市衣山地区では発掘調査事例が少なく、集落様相は解明されていないのが現状である。今回実施した調査では、古墳のほか弥生時代や古墳時代の竪穴建物が発見され、遺跡の様相や広がりを知るうえで貴重な成果をあげることができた。ここでは、時代別に概要をまとめる。

(1) 弥生時代

弥生時代では、衣山大塚北遺跡より後期後葉以降に廃棄・埋没したと考えられる竪穴建物1棟を検出した。部分的な検出であり、全体像は不明であるが、SB2は方形状に巡る周溝をもつ建物である。このほか、同遺跡からは重機による表土掘削時や時期の異なる遺構内より、後期段階の土器片が出土している。一方、衣山西ノ岡古墳の調査では、周溝内より後期後葉から末葉に時期比定される土器片が少量出土した。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は、衣山西ノ岡古墳より周溝1条と土坑3基を検出した。このうち、周溝1は『衣山西ノ岡古墳』に伴う遺構であり、本墳は推定直径17m以上の円墳と考えられる。墳丘や埋葬施設は検出されなかつたが、周溝内からは完形の須恵器をはじめ、弥生土器や土師器の破片のほか埴輪（円筒・朝顔形・盾形）が数多く出土した。出土遺物より、本墳の築造時期は古墳時代後期・6世紀中葉頃と考えられる。また、同遺跡検出の土坑SK6からは、土師器片や須恵器片のほかに埴輪片が比較的多く出土した。衣山地区では、調査地東方に7世紀前半の古墳である永塚古墳が所在する。残存全長18mの前方後円墳で、周溝内からは埴輪片や須恵器片が出土している。

一方、衣山大塚北遺跡からは、竪穴建物や溝、土坑などを検出した。SB1は検出長4.6mを測る方形竪穴建物で、出土遺物より廃棄・埋没時期は古墳時代末・7世紀前半頃と思われる。特筆すべきは、カマドに伴う煙道を検出したことである。カマド本体は遺存していなかったが、建物北壁から外側に向けて、長さ1.15m、幅20~40cm、深さ4cmを測る溝状の遺構で、竪穴建物と同様の土で埋没している。松山平野内では、煙道を伴う竪穴建物の検出事例は少なく、建物の形態や規模、煙道の構築過程などを解明するうえで、貴重な資料といえよう。このほか、SD1はSB1と主軸方位を同じにする南北方向の溝で、出土した遺物よりSB1と同時期の遺構と思われる。なお、SD1の性格は集落を区画する為の溝、あるいは排水等を目的とした溝と推測される。また、SK1は検出長0.95m、検出幅0.33m、深さ22cmの土坑で、土坑内からは古墳時代後期・6世紀後半に時期比定される土器片が出土している。なお、柱穴内からは6世紀前半代の須恵器片が出土した。

(3) 古代

古代の遺構は未検出であるが、衣山西ノ岡古墳検出の周溝1からは、奈良時代の須恵器や平安時代の土師器などが破片ではあるが出土している。衣山地区では、平成20年度に実施した衣山北組遺跡より、掘立柱建物をはじめ数多くの遺物が出土している。これらの遺構は衣山地区における古代集落

が広範囲に存在していることを示唆するものといえよう。なお、衣山大塚北遺跡からも、表探資料ではあるが、奈良時代の須恵器片が出土している。衣山地区丘陵部に展開する古代集落は、松山平野の古代寺院に供給されたと考えられる衣山瓦窯と密接な関係が考えられ、瓦窯が集落経営の基盤をなしていたものと思われる。

(4) 中世

古代と同様、中世の遺構は検出されなかつたが、衣山西ノ岡古墳からは周溝1内より和泉型瓦器碗の破片が出土したほか、近現代坑内からは室町時代の土師器壺や土釜の破片が少量出土している。

(5) 近世

近世では、衣山西ノ岡古墳の調査より、溝と土坑を検出した。このうち、SK2からは江戸時代後期の陶磁器片が少量出土した。

以上のように、衣山大塚北遺跡からは堅穴建物をはじめとする集落関連遺構が検出されており、同遺跡周辺には弥生時代や古墳時代の集落が広く展開しているものと推測される。また、衣山西ノ岡古墳では6世紀中葉の築造とする古墳1基が検出された。このことから、同遺跡の近隣には該期の古墳の存在する可能性が高いと考えられる。今後は、衣山地区における弥生時代や古墳時代の集落様相や変遷、さらには古墳の構造や分布などを解明することが急務となる。

写真図版

写真図版 1 ~ 10 : 衣山西ノ岡古墳
写真図版 10 ~ 14 : 衣山大塚北遺跡

写真図版データ

1. 造構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、
 35mm 判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン	90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67	55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール	28 ~ 85mm他
フ イ ル ム	白 黒 ネオパン SS・アクロス			

2. 道物は、 4×5 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ メ ラ	トヨビュ- 45G
レ ン ズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ス ト ロ ボ	コメット /CA32・CB2400
ス タ ン ド 等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フ イ ル ム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引 伸 機	ラッキー 450MD・90MS
レ ン ズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印 画 紙	イルフォードマルチグレードIV RC ベーバー

4. 製 版：写真図版 175 線

印 刷：オフセット印刷

用 紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.12

〔大西 朋子〕



1. 調査地全景（西より）



2. 表土掘削状況（南西より）

衣山西ノ岡古墳

図版
2



1. 遺構検出状況（北西より）



2. 遺構発掘状況（北西より）

衣山西ノ岡古墳



1. 周溝 1 積出状況（西より）



2. 南壁土層（北より）

図版
4



1. 周溝 1 ベルト土層（南より）



2. 周溝 1 遺物出土状況①（北東より）



1. 周溝 1 遺物出土状況②（北東より）



2. 周溝 1 西半部遺物出土状況①（北東より）

図版
6



1. 周溝 1 西半部遺物出土状況②（北西より）



2. SK6 検出状況（北西より）

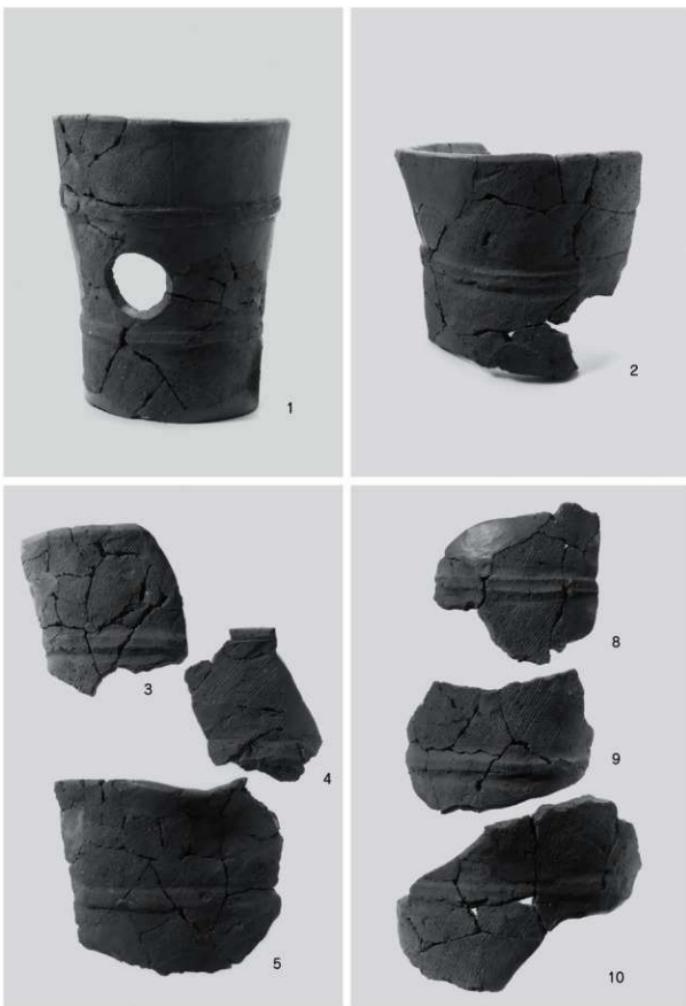


1. SK6 遺物出土状況（北東より）



2. SK7 検出状況（北西より）

図版
8



1. 周溝 1 出土遺物①



1. 周溝 1 出土遺物②

図版
10



1. 出土遺物 (周溝 1 : 23 ~ 26、SK6 : 29・31 ~ 33、近現代坑 : 34)

衣山大塚北遺跡



1. 調査区周辺状況(西より)



2. 調査区全景と遺構検出状況(東より)

衣山大塚北遺跡

図版
12



1. 遺構検出状況(西より)



2. 遺構完掘状況①(西より)



3. 遺構完掘状況②(東より)

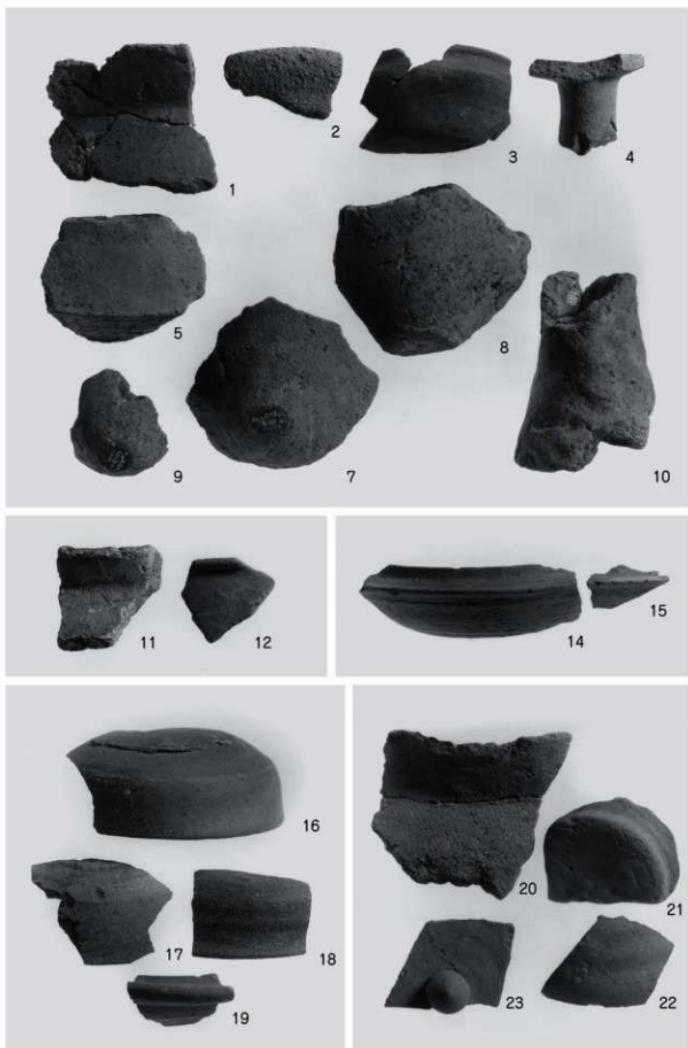


1. SB2完掘状況(東より)



2. SB1 完掘状況(北西より)

図版
14



1. 出土遺物(SB1:1~10, SP1:11·12, SP2:13, SK1:14·15, SD1:16~19, 表様:20~23)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	きぬやまにしのおかこふん・きぬやまおおつかきたいせき
書名	衣山西ノ岡古墳・衣山大塚北遺跡
副書名	
巻次	次
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第185集
編著者名	水本完児・相原浩二・大西朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2016(平成28)年3月25日

ふりがな 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 海岸番号	北 緯 ° ° °	東 経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
きやまにじの あかこ こは 衣山西ノ岡古墳	松山市衣西三丁目 641番、642番、647 番1・2・3の各一部	38201	33°51'06"	132°44'25"	20110301 /	約136	宅地開発
きぬやまとおおとせたひ いせ 衣山大塚北遺跡	松山市衣山二丁目 521番1の一部	38201	33°51' 13.653"	132°44' 32.435"	20110922 / 20110104	約25	宅地開発
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
衣山西ノ岡古墳	集 落 古 墓	弥生 古墳 古代 中世	周溝・土坑		弥生土器 土師器・須恵器・埴輪 土師器・須恵器 土師器・瓦器	古墳時代後期中頃の古 墳を検出	
衣山大塚北遺跡	集 落	弥生 古 墓 古代	堅穴建物・溝・土坑 堅穴建物・溝・土坑		弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器	弥生時代や古墳時代の 集落跡を検出	

松山市文化財調査報告書 第185集

衣山西ノ岡古墳 衣山大塚北遺跡

平成28年3月25日発行

発行 松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL(089)948-6605

編集 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6

TEL(089)923-6363

印刷 不二印刷株式会社
〒790-0054 松山市空港通2丁目13番30号
TEL(089)973-1266
